



婦人と子ども



第三卷第九號



謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡て左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行

定價 一冊金拾錢○六冊金五拾七錢○拾貳冊金壹圓拾錢○郵稅各一冊一錢○切手代用は壹圓増但壹錢切手に限る。

入會者 は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者 是錢にて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこさ○送金は神田今川橋又は日本橋區室町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこさ○見金は切手○壹錢に限る○十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れば御金に限り○印を御姓名の上にて附し候に付き早速御送附されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯 是に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこ

廣告料 一頁拾圓。半頁五圓

明治三十六年九月二日印刷
同 年九月五日發行

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 東京市本郷區本石町三丁目三十三番地
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目三十三番地
發賣所 金 昌

大賣捌所 東京 東京堂●同東海信文合資會社●同北陸館

婦人と子ども第參卷第九號目次

卷首

紀州の勝景

子ども

風の神

猿の裁判

いそつぶ物語

慈悲深い天子

懸賞などく

懸賞考へ物の披露

家庭

訓練の統一

過ぎたる躰け方

昔いろは料理

醬油の徴を防ぐ方及良否鑑別法

家庭閑話

學術

奇妙な動植物

在高師 田寺寛二

史傳

處女のカザリナ

薰風

文苑

逗子の歌

おとづれ

世の習ひ

竹柏會同人

つね

全人

説林

遊戲の方針

町田則文

雜錄

幼稚園案内

蠶魚のくひあせし

煙草の好な男へ○子供の問食○痰の検査○澁謙太郎氏○計入創出

讀書餘錄(三) 婦人善照兩面鏡

那瀑と辯八丁(口繪の解)

東基吉

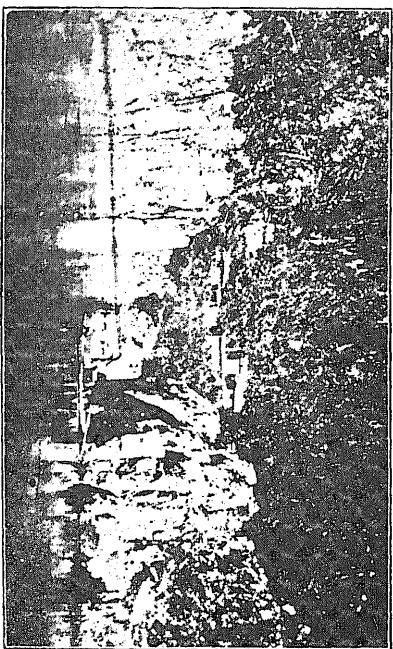
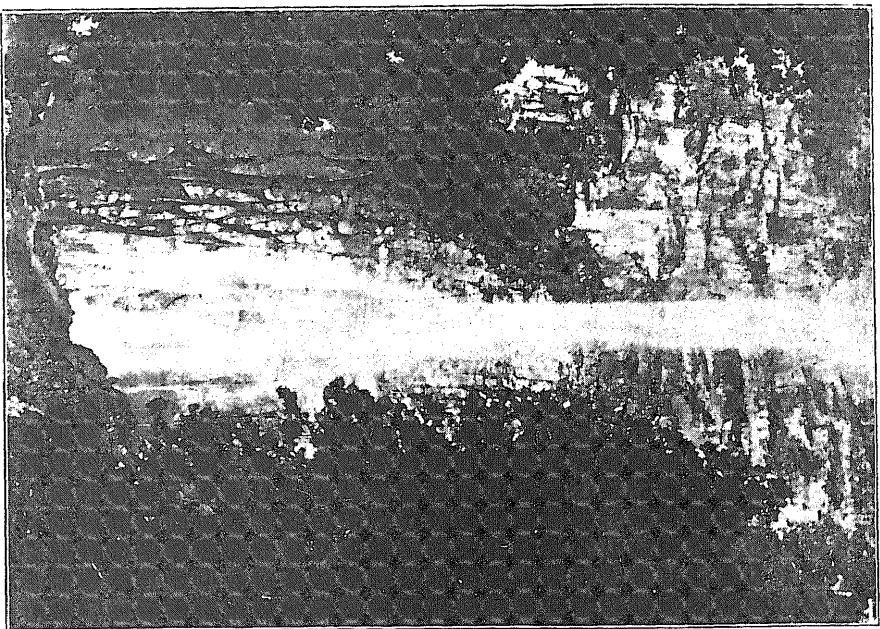
や

水

彙報

●櫻蔭會●文部省檢定豫備試驗問題●作法割烹夏期講習會の景況
●女子商業學校設立の計劃●東京市教員の俸給額●東京市内小學
校と女教員の増加●千葉幼稚園●東京孤兒院の新築●東京慈化院
●白痴の原因●女子服裝圖案募集●三十六年間の徒歩旅行●大學
卒業生の乞食●身體肥滿法●ソールスベリ侯●兵庫縣通信●會
報

景勝の州紀

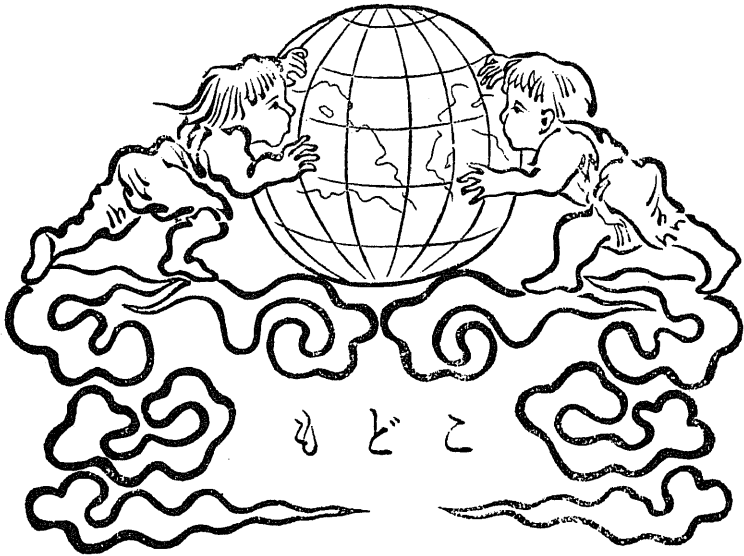


布瀑の知那

丁八瀬

もど子と人婦

號九第卷參第



風の神

やまとの翁

むかし／＼まづある處に
二人の兄弟がりましたと
さ。兄さんの方は、お金持
でした、弟の方は大變な
貧乏なんです。
ある時のこと、あつい夏も
やっと過ぎさりまして
そろ／＼涼しい秋の時候に

なりましたから、この貧乏な弟は、畑のものを刈り入れる積りで、おかみさんや、子どもらを家に残して、一人で、野らに行きました。さて、だん／＼刈り取って、やがて、家に歸らうとした所が、忽ち、大風が吹いてきて、折角刈り取った米を、みんな吹き飛ばされてしまひましたので、さー、怒るまいことか、團右衛(これは弟の名)は、眞赤になつて、

『こりや、いけないぞ、よし／＼今から行つて、あの風めを尋ねだして、一つ談判してやらう。人が折角骨折つて、あれ程集めたものを、吹き飛ばしてしまふとは、なんのこつた』。

夫から、すぐ家へ歸つて、支度をして居ると、おかみさんは

『あなた、どこへおいでになります?』

『今から、風の神を探しに行くのだ』といって、其譯を話しますと、

『風の神をですって!?! 探せるもんですか、そんな馬鹿なこと
は、おやめなさいな』

『いや、行くのだ、行って、何んでも尋ね出して、談判して
来んければならぬのだ』

といって、團右衛は、妻や子供に別れて、どこを目的ともなく
家を出て行きました。

さて、だんく山を越え、川を渡って行きました所が、とど
し、大きな森の中に這入り込みました、見ると、其中に、大
きな小屋があるので、まづ、この小屋で、一息休ませて貰はうと

思^{おも}つて、戸^とを明^あけて這^{はい}入^いつた所^{ところ}が、さー驚^{おどろ}いた、その小^こ屋^やの中^{なか}には、夫^{それ}はく大^おきなく年^{とし}とつた大^お坊^{ぼく}主^ぢが、家^{うち}中^{ぢゅう}一^{いち}杯^{ぱい}に擴^{ひろ}が
つて居^ゐるのです。何^{なに}者^{もの}でしよ、この大^お坊^{ぼく}主^ぢは？ 他^{ほか}でもない
全^{また}く風^{ふう}の神^{かみ}なんです。團^{だん}右^{えん}衛^ゑは、一^{ひと}目^め見^みて吃^{びっくり}驚^{おどろ}しましたか、仕^し
方^{かた}がないから、態^{わざ}とおちついて、

『やー、叔^お父^{ちち}さん、今^{こん}日^{にち}は』！ といつて、挨^あ拶^{さつ}しますと、風^{ふう}の
神^{かみ}は思^{おも}つたよりも叮^{てい}嚙^{がい}に

『やー、お前^{まへ}さん、何^{なに}しに來^きました？』

『はー、實^{じつ}は、私^{わたし}は風^{ふう}を採^{さが}しに歩^{ある}いてるのです、見^み付^つければよ
し見^みつからなければ、どこまでも行^いつて見^みつけてくるつもりで
す』すると、風^{ふう}の神^{かみ}は、大^おきな膝^{ひざ}を、ずっと前^{まへ}へつき出^だして

『フーン、ではお前さん、何かい、風の神に何か用でもおありなのかい、夫とも風の神が、お前さんに、何か悪い事でもしたのかい』

『したともさ、まー聞て下さいませ、こういう譯なのさ、昨日私は、妻や子供を家に残して、田へ行ったのでしよー、夫から僅ばかりの米を刈って、やれ嬉しやと思うて居る中に、意地の悪い大風が、吹いて来て、一粒も残さずに吹き飛ばして行ったじゃありませんか、もとく私も貧乏で、田といへばあれっばかしの小さなしかないのだもの、一日汗水くになって、やつと刈り取ったものを、何の咎もないに、たった一息に吹き飛ばされて堪ったもんでない。だから、私しや、家の者にいって、

何でも、風の神を探し出して、之からは、決して貧乏人のものを吹き荒らす様な、不人情な事をしてはいかないって談判して来ようって、夫で、まゝ、出かけて来たのです」

この話をきいて、風の神は、ポーンと大きな手を拍って

『あっそーかい、なるほど、これから氣をつけて貧乏人のものはなるべく、吹き飛ばさない事にしましょう。然し、團右衛さん、もゝ、風を尋ねに行くには及ばぬよ、實は、私が風の神なんだ』

『夫じゃ』と 團右衛は 風の神と聞いて、俄かに力づいて、
『お前さんが、あの 風の神かい!? 夫じゃ あの吹き飛ばしたお米をただ今戻してくれるかい』



『ハ、ハ、ハ、そりや出来ないさ、お前さんだって、一旦死んだ者を墓から、呼び戻す譯にゃ行くまい、だからさ、私もお前さんに損害を與へた丈のものを、他のもので返す事にして、此袋を上げることにしよう。で、いつでも、食物が欲しくなったら「袋よ袋よ、御馳走を出してくれ」といふと、すぐ何でも出てくるから、之で妻や子供は十分養ふことが出来るよ』
 といつて、柱にかゝつて居った、奇麗な包み袋をくれました。
 團右衛は、それを聞いて、非常に喜んで、

『イヤハヤ、働く事もしないで、食って行ける袋とは、有りがたいことですな、これは どうも辱けない』

『然し怠惰者は、すぐと失ふかも知れぬよ、さー、之を持って

早くお歸り、けども、お前途で、必らず酒屋に寄っては行けないよ、若し寄る様な事があると、いくら隠しても、私は知って居るよ』

『や畏まりました、決して、お言付は背きません』
夫から團右衛は、袋を貰って、風に違乞して、風の家を出て、歸りかけました。暫く行くと、途中に一軒の酒屋がある。其前まで來てから、團右衛は、風の神が言った事が、眞實か如何かを試して見たくて仕様がな。『一番、酒屋へ這入って、この袋を試して見ようかな、酒屋に這入んなどいったけども、な—に這入って見よう、知ってるなんて、風は見て居ないもの、知る筈があるもんか、え—這入れ—』

そこで、とう／＼酒屋の入口に向って行って、例の袋は入口の柱に引っかけて、ずーっと這入って行くと、店の者が

『やゝ入らっしゃい、』といったが、ひょいと、顔を見ると、知つて居る貧乏人の團右衛門であります、團右衛門は元來、いゝ人なんです、一つ悪い事には、生れ付いて、少々お酒が好きなので、この酒屋にも、少し酒代のお借りがあるらしいのです。店の者は、誰かと思つたら、團右衛門でしたから、又貸しになると思つて始めと違つて、餘り善い顔はしません、團右衛門も、夫と知りましたが、態と

『オイ、何か御馳走が出来てるかね』

と聞きますと、

『お相憎さま、さし上げる様なものは、何もありませんで』

といふ。そこで、團右衛は、「こいつ、一番試しに驚かしてやれ」

と思ひましたから、『ハ、ハ、ハ、夫では、他から取り寄せようかな』

といひながら、いきなり振り向いて、袋に向つて、『袋よく御

馳走を出してくれ』と叫びますと、驚くべし、忽ちの中に、種

々な御馳走が一杯に食卓の上に並びました。

さし、之には、店の者らは、皆吃驚仰天しました。それで、吾

も吾もとよつて、たかつて來て、『これは、不思議だ、どうも奇

妙だ』といつて、いろく其譯を尋ねます

そこで團右衛は、急に天狗になつて、『まゝ、そんなに噪ぐに及

ばんから、皆來て、これを食べればよいではないか』といふの

で、皆出て来て、丸くなつて、御馳走を食べたり、お酒を飲んだりして居ます。處が、一體此者共は、不良漢ですから、どうかして、この團右衛を酒に酔はして、其暇に、あの袋をすり代へてやらうと思ひましたから、いろ／＼甘い事をいって、團右衛にお酒を勧めます。好きなお酒だから、團右衛は、勧められるまゝに、つゝ飲み過ぎて、とう／＼そこへ酔ひ倒れて、眠つて仕舞ひました。すると、皆がそ／＼と、其袋を取りはづして代りによく似た他の袋を持って来て、其處へ置いて行つて、さて、夜明になりますと、皆が又寄つて来て、起したから、團右衛は、吃驚して目を醒まし、狼狽て込んで、すり代へられた袋を腰につけて、家へ歸りました（つゞく）

猿の裁判

二匹の猫が、どこかで、大きな牛肉、一片を盗んでしました。さて、それを、わけるときになつて、どつちが多いとか、どつちが少いかいつて中々、お話がまとまりません。そこで、自分よりは賢いといふ評判のある、猿の所へ、其肉を持って行つて、甘く分けてもらふことにしました。

すると、猿の先生、二片の肉を、秤にかけて見て、『なるほど、こつちが、少々重い様だな』といふ



少くなるので、

『あ、もし、其残つた分を、私共へ分けて下

て、其餘計な方の肉を少しひさちぎつて、すぐみシャ〜と頬張つてしまふ。すると、今度目は、

其方が反つて軽くなつてしまつて、前に軽いといつた方が、あべこべに、重くなつたので、猿の先生、少々考へて、

『や、今度は、こつちが、重くなつた様だ』といつて、又其方の肉を引きさちぎつて、頬張つて仕舞ふ、

二匹の猫は、夫を見て居つたが、自分等の肉が、だん〜

さい。もう、決して多い少いといつて喧嘩はしなせんから』すると、猿先生は

『喧嘩しないなら、始めからしないが、いゝじやないか、裁判にもち出したからは、裁判官は、どこまでも公平に、分けてやらねばならぬ』

といつて、二片の肉を、秤つて見ては、ちぎり秤つて見てはちぎりして、とう／＼、残りがなくなりそうになつて、しまつたので、二匹の猫は、も一耐らなくなつて、『どうか少くつてもいゝから、せめて、其残りを、分けて下さう』と願つた所が『いや、この残りは裁判をした賃に、私が貰つて置くのだ』といつて、一頬張りに残りの分も食べて仕舞ひましたとさ。

いそつぷ物語

其冊一 狐と山羊

一匹の狐が、深い井の中に落ち込んで、上ることができないで難儀して居る處へ喉が渴いた／＼といひながら、一匹の山羊がやつて来て、ひよいと、其井の中をのぞき込んで見て、狐に、井の水が、いゝか、どうかと尋ねました。狐は、自分の辛い事は隠して態と、愉快相に、水は餘程奇麗だし、冷たいから、すぐ下りて来て飲んで見玉へ、と下からいひました。山羊は、も一水飲みたい一方で、他の事は考へる暇なしに、すぐ飛び込んで、先づ一口飲んで見た。そこで狐は、始めて、此井から上ることの難しいといふことを話して、さて申しますには、

『そこで、どうかして、吾々はお互に助け合つて上らねばならん。だから、まづ、君は兩足を、此井の壁にもたせかけて、頭を下向けにし給へな。僕は、君の脊中を臺にして、上に飛び出るから、其後で、又君を助け出すことにしよう。』仕方なしに、狐のいふ通りになると、狐は、早速山羊の脊中から、角に足をかけて、ぴよいと、井の外に出て、それなり、行かうとしますから、山羊は、『夫では約束が違ふじやないか』といつて、狐を責める、すると狐は、ふり返つて

『君も、餘つ程馬鹿だなー、一體君が、其額の鬚はども頭に脳髓を持つてゐるなら、上り道を知らないで下りて來るといふことはあるまい。逃げ道の工夫をしないで置いて、危険い所へ這入るなんて、そんな馬鹿なことがあるもんか』

這入ル前ニハ、ヨク氣ヲ付ケヨ

其卅二 鳥と白鳥

或時、鳥が、白鳥の羽毛のいかに奇麗なのを見て、どうかして、自分も、あの通り奇麗にしたものだとかへた末、一體、白鳥は、毎日く水につかつて、洗つて居るので、夫であんなに、美しくなつたのだから、自分も、其通りやつて見ようと、考へ付いて、とうく巢から飛び下りて、川の中へ宿代をしまった。

そこで、毎日毎晩、水で洗つて居たけれども、いつまでたつても、黒い羽毛が白くならない、其中に、食物がなくなつて、おしまひに、死んでしまひましたとさ。

天性ハ習慣ニヨツテ代ヘルコトが出来ナイ

其卅三 渴した鳩

一羽の鳩がありました。非常に喉が渴いて居た時に、看板の畫にある盃に水の入つてゐるのを見て、繪だとは知らないで、いきなり、夫を目かけて、烈しく飛んで行つたので、イヤといふ程板へ、身体をぶつ付けて其爲に、羽を挫いて、地面に落つこちて、とう／＼通りかゝりの人に捕まりましたとさ。

思慮ニ過ギテ狂熱ニ走ツテハ不可ナイ

慈悲深い天子

アウストリアの天子で、ヨセフ第二世と申しました方は、大層な慈悲深い、親切な方で居らした方です。

ある日のこと、此天子様は、ウ井ーンの市街を、普通の紳士の様な姿をして、御散歩なすつて居

ました所が、年頃十二許の可愛い男の子が、オヂ／＼と、何か、言ひたさうに近ついてきました。夫と見て、紳士は

「お前、何か欲しいものでもあるのかい」と咄しかけたが、其聲が、いかにも優しくつて、様子が、どこまでも親切相なので、子供は、とう／＼思ひ切つて言ひ出しました。

「私は、御願があります、貴下は、屹度聞いて下さるでしょうね」紳士は

「そりや、聞いてやらうよ、けどもお前何が、欲しいの？ お前、乞食じやなからう、物の言ひ方や、お前の様子で分るが……」

「私は、乞食じやありません」

といつて、子供は、何を思ひ出したか、急に悲しくなつてきて、兩方の眼から、大きな涙を、ぼろ

ッ、ぼろッとおぼした。

「お父つあんは、もと、軍隊で、強い士官だつた

か、病氣になつて、仕方なしに、

役を引いたんだが、天子様から、

恩給を戴いて、夫で、皆が、食

つて行て居つたのです。けども、

とうとう亡くなつたもんだか

ら、もう、皆が、食つて行かれ

ない様な、貧乏になつちまつた

んです」

「フーン、そりや氣の毒だな」

「おツ母さんは居るの？」

「エ、まだ他に、私の弟も二人居りますよ、夫に、

おツ母さんは、一週間も、病氣で、起きられない

もんだから、二人が出て貰ひに行く間に、一人は

残つて撫つて居るのです」

こういつて、子供は、眼から落ちて来る涙を、無

理に出すまいとして居たが、ど

うしても、流れて来てとまり相

にもない。

紳士は どうにも可愛相に思つ

て、

「い、い、い、そう泣かなくつ

ても宜いよ、今に私が、どうに

かしてやらう、どうだ、近所に

お醫者さんは居るかね？」

「エ、居ますとも、二人居ま

す、ちき、私の所の傍に」

「ア、そ、夫ではお前今からすぐ行つて、其お

醫者を呼んでくることになさい、夫から、これは



ね金だよ、イーヤ、ね醫者さんのは、別に上げる、これで、何か、買つて、家へ持つて行くのだ」餘りの、嬉しさに吃驚して、子供は思はず、紳士の顔を見上げて

「まー、ありがたいこと！これだけのお金があればお母さんの病氣も助かるし、私らも食べて行けます」

「さ、構はないから、早く行つて、ね醫者を迎へておいで」

子供は大喜びで、醫者の所へ駆け出しました。紳士は子供から、其家を聞きましたから、すぐ其足で、そつちの方へ廻りましたが、やがて、子供の住家へとつきました。一目見た許りで、いかに、其難澁な有様が分ります、天子様は、委細かまはず、ザーつと、室の中へ這入つて行きますと、寢

て居るお母さんと、子供らは、吃驚して、不思議そうに眺めて居ます、もつとも、このお客は、自分たちの天子様だとは知る筈がありません。

天子様は、丁寧に、お辭儀して、

「奥さん、私は醫者ですがね、御近所の方から、あなたが悪いと知らしてききましたから、私に出来るだけの療治を致して上げたいと思ひまして、夫で、参りましたのです」

「ア、左様でございますか、どうも態々、御親切様に……」といひかけて、少し口ごもつて、

「けれども、先生、ごらんの通りの有様ですから、とてもお禮の仕様もございません次第で……」

「イヤ、其事なら御心配に及びません、あなたが全治なりさへすれば、夫で宜しいので」

といひながら、ずつと寢床の傍まで近よつて、い

ちく／＼容體の事なぞ尋ねて、夫から、何か紙片へ書きつけて夫を枕元に置いて

「エート、こゝに處方箋を置きますよ、何れ此次伺ふ時は、大分よくなつて居ましよう」

といつて、行つて仕舞ひました。

此お客が出るで行き違ひに這入つて來たのは、前の子供とお醫者さんです。這入るが早い、子供は

「おッ母さん、おッ母さん、まー、親切な伯父さんじやないか、そら、こんなに澤山なお金を下さつた方があるよ、」

といつて、兩手で、おッ母さんの手の上に、前程貰つた金を載せながら、

「だからさ、おッ母さん、もう泣くのは、およしよ、これ丈けあれば、お醫者さんもよぶことが出

来るし又おッ母さんの好きなものは、何でも買へるよ、其中にはおッ母さんも、よくなるからね」と、無性に嬉しがりながら、一人で喋舌つて居る。

おッ母さんは、不思議でならない。

「お醫者さんなら、ツイ、今の前來て下さつたよそらでらん、こゝに處方箋があるだらう、」

といつて、見せる、子供は、何の氣もなく、夫を手にとつたがズツと讀んで仕舞ふか、仕舞はないうちに、思はず知らず、嬉しさと仰天との叫び聲が出た。

「オー、おッ母さんく、處方箋の中でも、一番宜い處方箋だよ、何ぞつておッ母さん、恩給の命令書だ、おッ母さんの、然も天子様御自身でお記しになつた、まー、聞いてごらん、この通りだよ、

一筆申しあげ候、只今途中にてお前さまの息子に出遭ひ候處、嘗て勇敢なりし我が士官の一族が、頼るべき途なくして、非常なる貧困と病氣とに苦み居り候事を承知致し候。國內の事、一々承知致すは、とても身に取つて六ヶ敷き事故、今迄全く知らずに打過ごし候ひしが、既に承知致したる上は、此儘に捨て置くこと出来申さず、夫故、早速恩給帳簿に、夫人の名を記入し、爾今年々二千圓づゝ支給致すべく候

ヨゼフ二世、

夫から、おツ母さんと子供らは、天子様から、特別の御保護を頂く様になりましたが、子供らは、父の勇氣とこの母の優しい性質とを受けて、何れも、皆立派な軍人になりましたとの事です。

懸賞けんしょうなぞく

さあ 皆さん、懸賞のなぞくを出しますから
あてゝごらんなさい。

一、秋の虫とかけて

二、夏休みのお仕舞なつやすしまひとかけて

注意!!

● 答は家内總がゝりで考

へて宜^{よろ}しきこと ● 答^{こたへ}のべ切^{しめきり}は本月十五日限^りり ●

答の披露は次號。

賞品 一等 少年文學 二冊

同 おなじく
二等 どうとう
全 どう
上 じやう
一冊 さつ

答は一切左の處へあてゝ送ること

東京市下谷區竹町一番地東方

第三卷第七號考へ物の披露

先づ最初に後妻の子を背負ひて彼處に渡り次に前妻の子を一人り負ぶつて渡り、卸すと同時に前に渡し置きたる後妻の子を負ひて、跡戻りして最初の場所置き、前妻の子を負ひて渡し、最終に後妻の子を負ひ渡す時は、一所に置かざるもよろしからむ。

右の解答者氏名左に

第拾壹番	陸奥國	山田ちよ子
第九番	京都	石川靜子
第八番	東京	西村照五
第七番	兵庫縣	足立乃富子
第六番	東京	岸本福太郎
第五番	東京	黒澤芳次
第四番	大阪	香川つね子
第三番	東京	白井健造
第二番	東京	横山榮松
第一番	東京	増田しげ子

第拾貳番	東京	須賀國太郎
第拾三番	東京	淺田タイ
第拾四番	水戸	橋本小松
第拾五番	大阪	松田布美子
第拾六番	讃岐	高畑しげ子
第拾七番	大阪	瀧田正夫
第拾八番	東京	伊藤ゆき
第拾九番	東京	今井健郎
第貳拾番	名古屋	近藤多満子
第貳拾壹番	伊豫國	清家章子
第貳拾貳番	臺灣、淡水	安田雨子
第貳拾三番	大阪	鹽見肇子
第貳拾四番	水戸	高藤ひさ
第貳拾五番	廣島	吉田正治
第貳拾六番	寺田	利光
第貳拾七番	吳市	城戸よし

賞品として、金五拾錢の小替爲一枚ツ、

圈點を附けたる方に、即、一番、五番、十番、十五番、二十番、二十五番までに進呈せり。但し室内電話は、解答者五十人に昇らざりしに由り廢めたり。

近藤 とさ子

家庭



訓練の統一

教育上、訓練の統一といふ事は、非常に大切な條件となつて居る、即ち若し訓練に統一を缺いて居ては、教育は、全く其効力を失ふといふのである、訓練の統一といふと大層、言葉が六ヶ敷い様であるが、通俗に解釋して見ると、つまり、子供を養ふに、皆が同一の主義、同一の方針でやつて行くといふ事に過ぎないのであるが今此事を少し分解して考へて見たいと思ふ。

一、家庭に於ける訓練の統一、先づ一家族たるものが、残らず同じ精神で、子供を教育して行くといふのは、家庭教育上最も必要な事であつて、然も中々實行の困難なものである、一體子供に對しては、家族の全員が、總べて教育的勢力となるもので（勿論其勢力には大小の程度があるにしても）子供の父なり母なり、祖父なり祖母なり、殊に乳母があれば其乳母より、其他下女下男に至るまで、悉皆子供を感化訓練する力となるものである、若し之等の家族が残らず善良な同一主義の下に統一せられて、其言ふ事や、其行ふ事や、はた其考へる事などが、すべて純良高尚で其間決して互に相背馳する事がない時には、之を稱して立派な家風の立つた家庭と稱するのである。

此様な家風のある家庭に在つては、子供はどち

ら向いた所が、皆純良高尚な事許りで、朝夕一點野卑な分子を経験することがないのであるから此の如き所で育つ子供は、いかに其品性の善良ならざらんことを欲するも得んやといふ風になるのである、此の如きを稱して、訓練の統一を得たる家庭と稱することが出来る。

所が、さて實際に當ると、中々さう甘くは問屋がゐるしてくれない、なる程、事實其家庭には、チャンと立派な家風が立つて居るにしても、さて教育する上について、各自考が違つてくる、餘程注意をして子供の教育に力を盡して居る人々の中でも、時々教育上の意見が衝突する事があつてとかく統一がつかぬ、折合が取れぬ、つまり同じ精神でやる事が出来ぬ場合が甚だ多い、況んや家風も何もない家庭に於てゐやである。今其場合

を一々記して見よう。

第一、夫婦に子供。これは一番簡單な家庭で、所謂二人水入らずの中だから、萬事にかけて至極都合よく行き易く、(他の條件は取り除いて)訓練上これ程仕易い場合がない、こゝで、訓練の不統一を來す所は假令は父親の方から言つて見ると、子供の所で遠慮なしに母親を罵つたり叱つたりすることがあり、母親の側からいつて見ると、兎角子供を愛し過ぎて子供の過誤失策といふと、何かと父親に隠し立をする。この二の事實は、着々として訓練不統一の結果を顯はすもので、其最も見易い一つは、子供に對して、母親の勢力が、全く地に落ちて仕舞ふことである、いたづらつ子が、よく母親を侮つて、其言ふことを聞かなくなる其源因は、全くこゝに在る、母親の感化が、全く無

勢力となつては、家庭教育は、殆んど其價值を失ふ、而してこれは實に最初の訓練に統一を缺いた所から多く原因するのである。

第二、女中を雇入れてから、儲てこうなると又中々油斷ができぬ、とに角、二人水入らずの中へ他人が一人這入つて來たのであるから、そう今迄の様に簡單に行かぬ、一體が他人のことであるから自分たちが子供を思ふ程の誠實といふものは到底、他人たる女中や奉公人に向つては望むことができない、まして、教育上保育上の主義や何かはとても解し兼ねる者である以上は、折角、自分たち二人が甘く相談して、こんな事、あんな事は、決して子供に見せまい聞かせまいぞと定めた事も女中は何の氣なしに見せつけ聞かせつける、之を防ぐのは中々容易でない。而して彼等の子供に向

つての感化力は決して少くない。此事に付きては本誌に前號で聊か論じたから、茲では詳述しないが、兎に角、こうなると、訓練の統一は頗る困難になるのである。

第三、祖父母のある場合。これが又大抵一番に困難を感じる處で、然かも一番普通に見る所の家庭である、即ち子供に取つてのお祖父さんお祖母さんで、母親に取つての舅 姑のある家庭である、孫は子よりも尙可愛い、といふ所から、どこまでもお祖父さんやお祖母さんは精一抔に可愛がる。折角お父つあんやお母さんが、教育の上で考へた事も何も只だ可愛い一方から、老人たちは少しも考へてくれない。お父つあんやお母さんの方では『どうもそうくお祖父さんやお祖母さんの様に甘やかしてやつては、困るじゃありませんか、

だからでらんなさい、此子はいゝ氣になつて一つも私どもと言ふ事なぞ聞きやしません」と訴へる、老人の方は又やつきとなつて『さう〜お前たちの様に、八笠しく許り言つて居ては、孫が可愛相じや、チト子供にもなつて見るがよい』といふ様な具合で、兎角子供教育の上に、新舊思想の衝突が始まる、現に自分の友人などこれで頗る閉口して、どこかに赴任する時に、赤ん坊丈は妻君に托して老人と一所に置いて、自分一人で五才許りになる女の子を連れて行つた事なぞがある。これは、どこの家庭でも随分困難を感じる所で、どうか、老人育ちにしたくない〜とは、よく聞く所である。これには、全くの所因る、いや困ると許り言ては居られぬが、今日の場合どうも致し方がない、然しながら、だん〜と新聞や雑誌に

いろ〜教育の事なぞが出て来て、老人たちも新しい議論に接することが多いから、自然そう々々頑固な事許り言はないで、兎角教育上の事は、今の學問をした者に任せるがよいといふ様にはなつて來たけれども一般の場合は、まだ左様は行かぬ様である。此他に、書生だの、下男だの、又親類すぢの人などが大勢居ると、どうしても夫れ丈け教育の統一の上に餘計な注意が入るのである（未完）

（聲 水）

過ぎたる躰け方

和田 藏子

商なひの法を知らないで、商賣する者がありましたら、いつも、失錯をいたします、また、人の身体骨格の理を知らないで、醫者となる者があり

ましたら、之も、あやまちをいたします、之と同じく、世の父母若くは、保育の任にあたる者が、小児の身體精神の發達につきて、ひと通りの道理をも知らないで、大切の小児を、吾思ふまゝに、保育しようとしますのは、如何に危ふき仕事ではありませんか、例令ば、身心の發達に應じない無理な躰け方などをするが如きは、時々見聞する所でふいですが之につきて、少しばかり思ふ事を申し上げて、愛讀諸姉の、御批評を願ひます。

私の近所に、十二才の女児がありまして、其の兒は、年に比し、身體は小さくつて、其發達は實に不完全でありますが、働く事は、大抵の大人はとて叶はない位であります、私が其の兒につき、聞き及びました事は、幼なき時父母に死別れ、五六才の頃から、其の家へ、養女に貰はれた

との事です、養母は、年も若く、至つて疳持な方で、貰ひ早々、未だ、普通の小供ならば、幼稚園にでも、行くべき年であるのに、勝手むきの事から、買物から一切の仕事を命じまして、若し、少しでも、養母の意のまゝにならぬ事があると、すぐに疳を起して、無理の注文をなす等、養女に對し、實に、氣の毒なる次第であります。

右の結果でせう、其兒は身體の發育も悪くつて、人の前に出でゝは、何時もく臆してばかり居ります。

尤も習慣の力と申すものは、驚くべき者で、如何程、むづかしい事も、幼時より、馴らしますれば、左程に、苦痛を感じませんが、さりとて、小兒の精神身體の發達に相當しない躰け方を、無理に幼少の時から課しますれば、夫が爲めに、其精

神も身體も決して満足な發達を致す事は出来ませんことは、丁度此兒の様なものであります。

今昔いろは料理

石井泰次郎

(み)

簀やき拵方

松皮やきの如く(松皮やきとは魚の切身を庖丁刀にてすぢちがへに切目を入れてやくことなり)やきて、てり(味醂と醬油とを煮つめたるもの)を敷きて其てりの上に、かやの身のせん切をのするか、又ははそくけつりたる鰹節を毛の如くのせかけて出すべし

味噌漬の拵方

魚なにも切身にして、うす鹽をふりかけて、

暫くおきて、味噌を酒にて解きて、切身をつくるなり。又味噌を醬油にてときてつけてもよし。白き味噌に漬くる時は、之を翁づけといふなり。

(し)

鹽焼の拵方

何魚にても、切身にして鹽をふりかけ置き、のち一度其鹽をさつと洗ひて、又鹽をふりて串にさしてやくべし。急ぐ時は多くふりて直に焼くべし。又まるごと焼くなり。

汁の取合せ方

- 一、夕貌の輪切に、墨栗のすりたるをそへてよし。
- 一、冬瓜をみぞれに切りたるに、むきたるしいみをそへ、水に溶きたる芥子をおとし入れてよし。
- 一、ずいきに根芋を取り合はせたるもよし。
- 一、角切りの冬瓜に、花鰹をふり入れたるもよし。

一、當座ぼしのすいきに、一寸、とき芥子を入れ
てよし。

一、大ひかひを湯出で、つぶしたるを、汁を取り
分けて下煮して、椀に盛りて、其上より汁入れた
るもよし。

醬油の徴を防ぐ法及び

良否鑑別法

在攝津 平 岩 繁 治

暑中になりますと、とかく、味噌醬油等が徴びて
きまして、第一番に、勝手本のお女中等が困まる
のでありますから、今度は醬油の徴を防ぐ法を御
紹介申し上。此の法は極く簡短で、その上別に費
用もかゝりません。先づ芥子粉を水で堅くねりま
して、此れを四匁位の丸玉に丸めて、醬油一に

き此の丸玉十五六個の割合に、麻の布に包みて醬
油の樽の中に入れ、一ヶ月に一回宛其の丸玉を新
しいのと取りかへさへすれば、決して徴びる心配
はありません。又生鹽を充分いりまして黒色にな
りましたじぶん醬油一斗につき五勺の比例にて之
を入れましてよくかきまぜますれば大に徴を防ぐ
特効があります。

醬油の善惡を検査しますには青地の茶碗に少許の
醬油をいれまして、箸をもつてかきまわしますと
泡がたちます、その泡が枇杷色で且暫時消へなけ
れば其の醬油は精良の醬油であります又右の如く
して色淡赤色なれば（泡不整）其の醬油は下等な
のです。

家庭閑話

その子

▲又なき友の尙嫁かで居させるが、一日吾に向ひて、結婚後の生活と、一人にて過し、時の夫と、何れか楽しみ多きと、尋ね給ひぬ。

▲一口にいはんには結婚といふもの互の幸福を進めん爲めなること勿論なれど、さりとては、夫を持ちて以來、袖に涙の露の干ぬ花嫁も在さん、妻取りてのち、今迄に覺にざりける人知れぬ苦悶を経験せらるゝ男もありぬべし。かゝる方面をのみ眺めたる人、殊には稚なき時より調はぬ家庭に人となりたる者には、かゝる疑問のたこること、宜ならずとは申されし。

▲何事にも正しき條件こそ必要なれ、結婚によりて、より不幸の境遇に沈みたる人々は結婚の條件

を忽にしたればなり。誤りたる條件の下に結婚せんよりは、寧ろ退いて、單獨の生活に悠々自適の樂を專にせんこそ一生の幸福なるべけれ。

▲世路由來艱難多し、人生豈嬉樂なからずや、悲を減じて半とし、樂を増して二倍とする、これ誠に朋友の賜とこそ聞け Friendships multiply joy and deplete griefs. 夫婦は一身同體、其間彼なく我なし、其賜いかにぞ、朋友の夫と同日にわけつらふべしや。

▲ゲーテと申す詩人の言葉に、帝王たると農夫たるとを問はず、家庭を樂む人は最も幸福なる者なり He is happiest, be he king or peasant, who finds peace in the home. とふを聞き侍り、よし恒の産なくとも、家庭だに圓滿ならんには、世の罪惡の半は救はれぬべし、而して男子は家を作れ

ども家庭を作るは婦人の力に在れば Men make houses, but women make homes. 平和なる家庭を作することは、中々に、自分たちの幸福の爲のみにあらず。

▲智識は人を愚ならしむ、家庭の要素は智識にあらずして感情にこそあれ、同情、恩愛、深切、さては仁恵、温順などもろゝの感情の一家に浸漸するありて、こゝに、圓滿なる家庭も成立ちぬらん、智識は分解的なり感情は總合的なり、吾と彼とを密着せしむるは智にあらで情なり、ましてや知るといふとは、獨り、智の働きのみに屬せず、情を待って、高尚なる眞理も解せらるべきに於ておやと、鹿爪らしく論へる人のおはせし。

▲別れて久しき友の、地方に在せるが、先頃一人の女の兒まうけ給ひしとて、贈し給へる文のはし

に、

此頃はなす事もなくて、たいく子どもの顔のみ眺めて一日く過ぐしをり申し候。今年もはや半を過ぎ候、又々間もなく自分たちの年を重ね候かと思へば、何となく情なく候へども、夫れ丈け子どもの生長するかと思へば、又なく樂しき心地致され候……………

Water, Smoke and a Vicious woman, drive men out of the house.

水と煙と不貞の婦人とは共に男子を屋外に逐ひ出すものなり

奇妙な動植物(ついで)

高師 田寺寛二

(五) 風鳥

風鳥はニョーギニア及び其附近の島に産する鳥であつて、其羽色の美麗なこと、その形のしなやかなこと、その羽のつき具合など、此世のものとは思へない程である。極樂鳥といふ美名がついてお



るのも無理でなし。

此鳥は圖の様に尾翅の長さ三十四インチ(我二尺八寸四分余)もありまして、糸の如く綿々と長く柳の枝の如く突々と垂れてゐる。

雄鳥はとりわけ其彩色が美しく巧みに出来てゐるです。この美事ないでたちで、人から大切かられ賞められる様に、その美しき羽その雅やかな姿は、雌鳥からもめでられるらしい。

此鳥が翼を直上に上げるか、或は之を動かすときには其下か

ら燦然たる黄金色をしてゐる羽が出ます。此羽の先端部の真中に小さな光輪がありまして、すきと

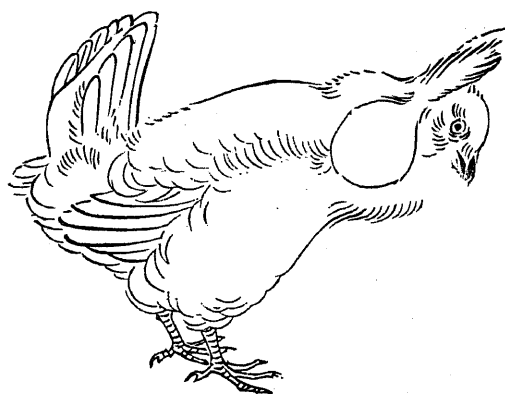
はる様な緑色をして光つてゐるで
す。だから丁度緑色の光線を發
する玉の様です。

同じ美しい風鳥の中でも、此光
輪のないのもありますし、黒鵝
絨の様な細かな羽毛で綾どられ
たコバルトの様な青色をしてゐ
るものもあります。

(六)

テトラオ、
クビド鳥

テトラオ、クビドといふ鳥は亞
米利加のカナダ地方にゐる鳥で、其雄は頸の兩側
に各一個宛の橙黄色をしてゐる羽毛のない膜質



の袋があります。

この袋は何の爲めになるものと申しますと、蛙

の咽喉部の兩側にあつて、その鳴
く時に膨大し、其聲を大さうする
爲の袋と同じ様に、其交尾期の間
雄鳥は此袋を膨らして穴の中にく
いもれた様な奇妙な音を發します
此音は随分大きな響がしますので
可なり遠方からでもよく聞えます
前に云ふた様に此袋が此鳥の音を
出す上に大きな影響をもつてゐる
といふことを確かにするまでには
あらい學者がいろいろ研究された

らしいです。

或人の研究では、この一つの袋を針の様な細いも

ので刺すと、音は大部分滅ぜられます、兩方刺し破ると斷然止まつてしまつて、全く音が聞えない様になつたこのことです。

此鳥は其交尾期の間、耳房や頭の部の羽を迷立て、頭の上の毛冠をかくしてしまふといふことです此圖の頭の上に角の様に突立つてれる羽は即ちこれです。

また此鳥の雌の袋は雄と同じ様に頸の兩側にありますが、余程小さいです、其上に此袋には雄の袋の様に膨れるといふ力が少しもないです。

行水の

すて所なし

虫の聲

史傳



處女のカザリナ

薫風

ビーター大帝の配としてのカザリナは、史多く傳ふ。ビーター第二世としてのカザリナ、亦世之を説くもの多し。予今、試に其の雌伏の小史を探らんとす。

カザリナ、アレキスチーナは、リボニアの一小邑、ダーバットの近傍に生れ、兩親よりの遺産として、唯身一つのみなりき。父死してのち、カザリナは、年老いたる母と共に藁屋の内に人と爲り、不自由勝の生活にも、別に人をも羨まず。他

意なく其の日を過しつゝ、浮世の波の外に立ちて世人の注視に漏れつゝも、已が手藝に唯一人、今は餘生も長からず、何のたつきもなき母を、もりかしづきて暮せりさ。

カザリナ曉に起き出で、朝に紡績の事に従へば、老婦は、其の側に座してバイブルを誦し。暮霽林に横はりて、日晡けば、一日の勞役は此に終りを告げて、爐火の側に質素なる夕餐の食卓に、母子共に、樂の笑を浮べぬ。彼女の日常は是の如く單純なりき。而して其の姿容と人格とに至りては、誠に人の模範たるべきものあり。其の愼密なる注意は、轉た、思量の遠大なるを推せしめぬ。母は彼の女に讀書を教へ、老牧師は常に、格言と宗教上の義務を説て、之を訓陶したり。而も、天の彼女に附與せる所以のものは、唯其の未來の運

命のみならず、堅固なる思想と、正しき才能は、自から備はれりしかば、眞個完全なる女子として結婚の申込は、多くの村人より提起せられしが、老母をして、獨り淋しく暮さしむるは、其の忍びざる所なりしかば、之等の提言は、皆空しく斥けらるゝのみりき。

カザリナの母を失ひしは、其の十五歳の時に在り。未だ浮世の波風を知らぬ身の、獨り淋しき、藥屋の裡に取り殘されたる事なれば、彼女は竟に其の幼少の頃より、訓陶の化に浴したる、老牧師の許に行き、其處に、其の小供の教師の資格を以て、身を寄せしが、其の活氣ある性格と、正しき節制は、何日しか小供を心服せしめ、益教師の信用を固うしたり。

老牧師は、全く家族の一員の如く、自身の小供

の如くに之を取扱ひ、其の家族と共に、師に付て
音曲舞蹈をも學ばしめたりしか、時運旋轉、老牧
師亦實を易ふるに至り、カザリナは、再び、世に
寄る邊なき、憐の身の上となりぬ。

是時に當り、リボニヤ地方は、戦争の爲に荒涼
を極め、世は血腥き風荒みて、田野荒廢、餓莩四境
に横はるの光景なりしかば、カザリナ、假令、貧
苦に付ては無上の辛酸を嘗め幾多失意の域に出入
せりしとは云へ、時も時、機も機とて、頼む木の
下、幹折れて、貯蓄は日々に幽かになりゆき、自
己の僅かばかりの貯さへ、最早遣ひ盡せしかば、
今は此の地に永居すべくもあらず。遂に意を決し
富裕望を層すべき地として、マリエンポーを指し
て、旅立つこととなりぬ。

手許に残る些少の衣服は、小さな包みに行李を

調へ、僅かの路用を工面して、思束なくも唯獨り
足に任せて立ち出てしか、由來嶮峻、土瘠せて、
見るからしるさわはれの地なるに、端露の人等の
抄掠に、一入物の淋しさを、増しぬる内を、誰を
たよりとする當もなく、旅の疲れと、道の危険に
飢も忘れて彷徨ひしことも幾度、昨日と暮し、今
日と明し、誰慰むるものもなく、曉に衣袂を路の
邊の草の露に活し、夕に淋しき月を負ふて、知ら
ぬ宿りの風の音に、夢を驚かし、辿れる道も幾日
夜、或誰そ彼の鐘暮れて、夕月かげも薄き頃、杖
を力に立ち寄りしは、路の側の一ツ舎にて、今宵
の宿と頼めるにあはれ、虎の尾を踏みて、身は瑞
典の二軍人の手に落ちぬ。若し此の際、年少下級
一士官の來る微りせば、如何なる凌辱を蒙りしや
も知るべからざりしを、足音に驚きて、暴漢等の

逃避するや、カザリナ先づ仰で其の人を見るに、感謝辭なくして、驚愕先づ大なり。思はざりき、之れ其の訓陶の師にして、恩人たり、友人たりし老牧師の男ならんとは。

此の會見は實に、カザリナの幸運なりき。長途の旅に、僅かの貯へも全く盡き果て、身の廻りさへ、襤褸となりぬるを、仁慈なる同郷人は、先づ家に伴ひて、衣装を調へしめ、書を以て父の親友マリエンボーの監督、グラツクに彼の女を推舉し馬を與へて、程に上らしめぬ。

カザリナのマリエンボーに至るや。直ちに長官の家に寓し、其の二女の教師となる。芳紀時に十六、而も其の徳と禮節とは、能く訓育の化をなしぬ。而して其の才色は、到底埋もれ了るものにあらず。伉儷を得んとするもの頻りに至る、然れど

も、獨り潛に決する所あり、其人、假令一腕を失ひ、軍務の爲に不具となりしも、其の恩に浴するや誠に深きものあれば、以て已れの終世を托し、因て他の請を拒かんとし。偶々事によりて邑に來るや、直ちに意中を彼の士官に語るに、情意亦相合するものあり、此に於て、交歡の式は遂に舉られたり。

幸か不幸か。好歡夕を終ふるに由なく、鴛鴦の杯は又訣別の悲を含み、露軍長驅、マリエンボーを圍み、不幸なる士官は、席上より隊へ呼び還されぬ、綿々たる恨之より長へに、彼の士の影は竟に再び見るべからざるなり。

筒の音、喊の聲、硝煙日暗く、悲風夜々枕頭に腥を傳ふ。叫喚號哭、世は修羅の苦に在り。マリエンボーの圍幾日、無辜の民、無垢の處女、虎の

如く狼の如き、北國二軍の爲に、其の運命を犠牲とせらるゝもの幾許、城竟に陥りぬ。潮の如く攻め入る敵軍、苟も住民と云へは、男女を問はず老幼を論せず、劍光閃く所、腥風生じ、四境の風物、盡く血を以て飾られ、戦後幾閱日、月光獨り青し。

カザリナ、幸に囊中に潛み、其の禍を免れしか
遂に又、憐れなる境遇に立たざるべからざるなり
是に於てか、其の運命に任せて、身を處せんとし
婢僕の事に従ひしか、謙讓信神、以て已を持し、
と雖とも、其の天真の瀟洒たるものは、自から失
はざりき。而して其の有徳と從順の風評は、遂に
露の將軍なる皇子メンジョツフを動かすに至りぬ
是に於て、皇子遂に主人の士官に請ひ、カザリ
ナを其の官邸に容れて、姉妹の許に在らしむ、而

して其の楚々たる風采は、日に光彩を生じ、ビー
ター大帝の一顧、リボニヤの農家の女、忽ち雲臺
を攀ちて、ザ一の國に万民の儀表と仰かるゝに至
りぬ。(完)

靡き得て

國の寶となるものは

ひとのこゝろの

玉にぞありける

月 照



文苑
逗子の歌

東久世通禧

かりたちて梅の花かひ櫻貝

拾はん春になりにけるかな

里井柳枝子

旅やかたいでいる人の影たえて

田こえの浦は秋ふけにけり

浅井鐵子

汐あみし人も歸りてなみ松の

葉山の磯に秋風ぞふく

板倉止子

月かけは葉山の浦にたゝよひて

見るめ涼しくよする白波

三十八

設在御幸子

白波にうつらふ春のわけづのを

いかに見るらんうらのあま

關屋愛子

筆とりて書にもかゝはやいひしらぬ

田越の浦の月の夕べを

佐々木 春尾子

沖とはくよる行く船の數みえて

葉山の浦は月さやかなり

大河内桂子

白波の清き濱邊をさまよへば

みそらにかすむ不二の神山

松永そよ子

月さよし波の音涼し思ふとち

田越の浦の浦つたひせん

西 升子

春かすみふかき葉山の木の間より

見ゆるはかけや何地ゆくらん

板倉 藤子

波白き葉山の浦の松かけは

千年ふむともあかしとぞ思ふ

奥村さし子

よせ返す波のしらへも音すみて

葉山の浦は月さやかなり

横山 碩

あつけさをさけてのみとふ人々に

田越の浦の春を見せはや

加藤 雛子

こえくれば松の木かけに海みえて

白波かすむ返子のうらく

相澤 求

立ち并ぶ松の葉山の浦風に

はてうちて行くあまのつり船

大竹伊勢子

よる波の間なくひまなく音さやく

葉山の浦は夏としもなし

同上

立ちこむる霞の庭ものとかにて

葉山の浦は月になり行く

佐藤朝恵子

高殿の玉翠のしらべ音たえて

葉山の沖に秋風をふく

井原 豊作

おなしくはかゝるさかひに住みてまし

松青きところ波きよきところ

おとづれ

つねを

ひしの歌聲

さゝながら

庭によりたる

まる窓に

問はず語りの

あきの夜は

ひとりこゝろを

もみぢ葉の

あかき情けの

あふれてか

こひしき友の

染められて

折りから告ぐる

雁が音の

嬉しさあまる

けふの音信

世の習ひ

かはり行く世の
つよきはさかえ
日々にたぐるゝ
世界の地圖に

全

ならひとて
かよわきは
ことわざを
見するかな

人

説林

遊戯の方針(承前)

町田則文



四十

第二には、其遊びの重なる事柄は、皆筋肉を勞する、決して文學的なといふ事でなくして、皆筋肉を動かす、即ち身體の活動に關する事が多い。頭腦を使ふといふような遊びは子供の内はない、皆必らず相撲の取合ひとか、走りツこととか、筋肉を發育させるを主眼として居る、甚だしきは粗暴的原素を含んで居る、男ならば戦争事とか、人を

打つとか、皆粗暴の原素を含んで居る、これは矢張百分中七十七位さう云ふ意味の遊びである、或は泥を捏ねて假山を造るとか、假川を作るとかの如き手藝的の遊びも其外にある、之れ等と前の筋肉のを合すれば百分中八十五半は身軀的發動に關する遊びが多い、さう云ふ時代に當つてはさう云ふ事實が有るのであるから、さう云ふ時代に吾々が強いて話をして聞かすとか、智力的ばかりの要素を含む遊びを課するときは子供の性質に適合ぬ事にならうと思ふ。子供は或る形か他の形に於てさう云ふ事實があるとなれば、身體を働かすと云ふやうな遊びの種類でなければ子供には適せぬ事かと考へる。

第三は文學とか、技藝とか、音樂とか、さう云ふ智力的の嗜みは眞に少ない、況んや人類を恵む

とか、又は智力的の働きは、其遊びの中に少ない殆ど皆無と言つて宜い、と云ふやうな事實が實際上より統計になつて居る、

第四に身體を活動させる事實は八歳から十三歳までが非常に激しい、それを好む事が八歳よりして次第に増して行く、それから後には段々減じて行く、これに反對で段々十三歳後になると先刻申した技藝とか文學とか人類を恵むと云ふ遊び、他の凡て同じ遊びをするにも醫者の眞似事をするとか、人類を助けるやうな遊びをするとか、十三歳後から段々増して、一所に集まりて繪を畫いて遊ぶとか云ふ事が、十三歳後になると増して行く、殊に粗暴な遊びと云ふものは十一歳位が最も盛んであつて、さうして殊に其遊びが夏に多い、冬になると減ると云ふ事實がある、夏は蜻蛉を捕ると

か、蝶々を捕へるとか、夏向は激しくて冬になる
と餘程減つて行く、と云ふやうな事實が統計上か
ら得られた事である、

第五には男の子と女の子は自然とドウも合同し
て遊び仲間に入らぬと云ふ事實を得らるゝ、段々
調へると男女一所になつて遊ぶ事が少ないと云
ふ證據が得られた、従つて女兒は或は人形を並べ
て見るとか、凡て如何にも内輪の遊びをする^いと云
ふ事が男の子の三倍だけ多い、それから女の子は
人と交際の遊びをする事多し、或は飯事をする
とか、お客さん事をして遊ぶとか、社交的に關係
した遊びが男子より五倍程多い、それから手業の
遊びをするのは、例へば同じするにも泥の細工を
するとか、或は紙を折つて遊ぶとか、さう云ふ手
業に就ての遊びと云ふものは男より三倍多い、亦

それから人を恵むとか、人の世話をする事の遊び
は女子の方が男子より二倍多い、然るに男子はド
ウしても粗暴的の遊び、或は走りツコをするとか
蜻蛉を捕るとか、犬を逐つ駆けるとか云ふやうな
粗暴的の遊びが女子より五倍多い、女子はさう云
ふ事をする事は甚だ少なし。其他身体に關する所
の遊び、身体を活潑にヒドク身体を活潑に遊ぶ事
が女子より七倍程多い、それ等は子供が自然の遊
びから起つた統計である、それに依て考へて見れ
ばドウしても男女は一所に遊んで同じやうに興味
を感じると云ふ事は實際の種類を調べてドウして
も無いと云ふやうな事實の統計が出来て來て居る
のです、故に尙之を申して見ると、身体を活動さ
せると云ふ方の、筋肉を活動させると云ふ點から
申ますと、男子の七十七に對して女子は十位の割

合である、勿論此等は元とより他人、然かも外國人の集めた材料ですから、一々吾が日本の今日の實際の兒童に就て調べれば割合が違ふかも知れぬが、とにかくそう云ふ遊びに就て調査をすればさう云ふ事柄である。故に私共が幼稚園なり小學校に於てなり子供の遊戲についてさう云ふ心持で調べれば種々發明する事があらうと考へる、其上に女子は餘程他人の造つて呉れた遊びを男子よりは一層好むと云ふ事がある、男子はドウしても他人の造つたは少し氣に入る遊びでも好まぬと云ふ事も餘程ある、其等から考へて見れば女子の方は早くから人と交際すると云ふ社交的の考へ、自己及び他人に對する感情と云ふ事が餘程早く發達する男子の方は何時まで經つても野蠻的、粗暴的と云ふ事は免れぬ、故にドウしてもさう云ふやうな遊

びは丸て自分が獨りで以て他には構はず、自分さへ宜ければ宜いと云ふ遊びを好んで居る、蜻蛉を捕つても、犬を打つても、自分が先さに行つて犬を打ちたいと云ふ事ばかり考へて居る、男子の方には所謂野蠻的心持が年を取るまで遺つて居る、自分さへ宜ければ宜い、自己及び他人と云ふ考へが乏しいと云ふ事が考へらるゝ事が出来るです、さう云ふ風に一体男子と女子の關係と云ふものが彼等自然の遊びに任かして、それに就て判斷をして見れば誠に相違がある、故に吾々が遊戲を作つて子供を遊ばすに就ても、強ち此事が充分正しいとは言はれぬであらうが、併ながら此遊戲をさせるに就ては大に吾々が顧慮すべき事では無からうか、今日種々の遊戲法に就ても、面白い遊戲法がありますけれども、さう云ふ事實から出來て

來た遊戯は乏しいと思ふ。故に幼稚園なり小學校に於ては、其邊に就て考へる事が必要であると云ふ考へであります、(つづく)

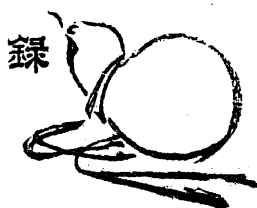
There is no riches above a sound body, and no joy above the joy of the heart.

健康の身體に越ゆる富なく心の喜に勝る喜なし



雜

幼稚園案内



録

四十四

東 基 吉

女子の職業としての保姆

近來に至つて、女子の執るべき職業の路は頗る開けた。電話交換手としても女子を採用するし、郵便事務員としても女子を採用するし、其他會社とか商店などに於ても大に女子を採り用ゐるといふ傾向になつて來た。之はつまり女子の事業に對する價值といふものを漸く世間が認むるに至つた

のであるが、抑々又女子の方から見ても、何か一つ身に藝を覚えて置く、職業の智識と技能とを得て置くといふことは將來、例令、人の妻となるにしても、頗る必要だと感じられて來たかに違ない。

女子の執るべき職業は、勿論此他種々多方面に開けた。然し吾人の考ふる所によると、其中最も適當したものは、教育に従事することだと思ふ。一般女子の天性其他いろ／＼の點から考へて、教育事業は最も適當した職業だと信ぜられる。されば外國に於ては勿論、我國に於ても、近來著るしく女教育の數を増加した事は、事實である、(彙報欄参照)而して、幼稚園保姆として、幼兒の保育に従事することは、教育事業の中でも、殊に適當した職業である。第一、將來、人の妻となつた曉

には婦人は到底家庭に於て、幼兒保育の任に當らねばならぬ。而して幼稚園保育に従事することは、即其準備を造つて置くと同じことである。幼兒の心身發達の理法だとか、之を助長させる一般の原則などは、將來人の母となるには、是非とも心得て置かねばならぬのである、而して幼稚園事業に従事するには、是非之を充分心得て、其上實地保育の事をせねばならぬから、將來自分の子を育てるに非常の經驗を得ることになる。獨乙あたりでは結婚の資格を得る爲に態々幼稚園保姆養成所に入學する者が多い相だ。次には、一体に婦人の温順和氣の性質は、最も彼の可憐な幼兒の友たるに適するのである、温和な婦人は、此事業に従事するによりて、益温和となり、よし然らざる者も此天使の如き一群の中に這入つては、どうしても

靈化せられて、勢ひ天女の様な心持にならざるを得ない。次に、今日に於ては、又資格を得ることが割合に容易だ、即尋常科の准教員の資格を得れば幼稚園保姆となることが出来る、夫でなくとも、府縣知事が、其履歴を見た上で、之ならざらばといつて、免許を與へてくれれば、夫でなれる。他の事業から見ると、現今我國の規程では、一番容易である。夫で俸給はといふと、先づ東京市内などでは、主任の保姆で凡そ十四五圓から十七八圓普通の保姆で八九圓から十二三圓が通例の様だ、地方へ出ると、主任で二十四五圓から十七八圓普通の保姆で十一二圓も得られる、先づ自分だけ食つて行けることは、大丈夫である。以上の點から考へて、幼稚園の保姆といふ職業は、女子に執りて、至極適當した事業だと思ふのである。

之から、數回に亘つて、幼稚園事業の大略を述べようと思ふ。

四十六

幼稚園及保姆幼兒の數

幼稚園は、追々其必要が認めらるゝからして、漸次其數を増加するに至つたが、然も我國に於ては、其發達進歩は未だ盛だとはいへぬ。外國殊に北亞米利加合衆國及佛蘭西などは、頗る盛況である、左に此二國の園數保姆幼兒數を擧げて見よう。尤も之は三四年前のである。

園數 保姆數 幼兒數

合衆國	四、五四〇	九、二三四	一八九、六〇四
佛蘭西	五、八〇三	九、六八二	七四四、一二六

我國の四五年前の調査によると次の如し、最も一兩年の間に自分の知つて居る範圍でも、大分増加したと信じて居る

園 數

保姆數

幼兒數

二三〇

六一八

二一、八六一

日本で幼稚園の發達が、遅々として進まないに
つては、勿論いろいろの事情が原因をなして居
るであらうが、保姆に適當なものを得ないといふ
ことが、其最も主要な原因の一であらうと考へる。
而らば何故保姆に適當な者を得ないかといへば之
にもいろいろの原因があらうが、

保姆養成所

といふ様な學校のないのが、確に其一因であら
う。地方では、所によると師範學校女子部とか、
女子師範學校などで、會に、保姆養成科を置いて
居る東京では、教育會の事業として二三回、半年
の講習會を開いた事もあつた。然し何れも、其時

日といひ設備といひ不完全で、到底、満足な結果
は疑はしい、女子高等師範學校で、先年一ヶ年の
年限で、保姆練習科を置いたが、之も現今は打ち
絶えた。要するに、満足に保姆としての訓練を與
へる機關は、今日の處遂に見出されないものである。
外國に於ては、保姆練習學校といふのが、大抵の
幼稚園に附屬して居つて、其處で保姆としての修
業が出来る様になつて居る。

保姆の資格

然らば、其所謂保姆となるのには、どんな資格
が必要か、欲をいふと、中々述べ切ることは出来
ないが、先づ、大體を記して見よう。

一、身體の強壯。何の職業にも、之は極めて必
要であるが、わけて、斯道に當るには身體が弱く

ては、中々幼兒の面倒が見えぬ。別して、保育に禁物たる、短慮、不耐、怒りつばい事、不機嫌等は、身體の弱い人には、とかく有り勝ちである。

二、慈愛同情に富むこと。たゞひとつめでは、幼稚園のことは、とても出来ぬ、心から子供を可愛がつて充分の慈愛と同情を以てかゝらねば、到底人の子……何事も辨へのない幼兒を指導して行くことは出来まい。幼稚園のことは、他の教育事業よりも餘程献身的の分子が含まれるのである。

三、忍耐。不耐といふ言葉は到底、こゝでは禁句である。何れ三つや四つの子だ、理屈を言つたり叱つたりは、効が少ない、のみならず、反對に惡癖を與へる様なことになる。詢々として倦まず撓まない愛情を以て感化することを力めねばならぬ。一寸した事に腹立て、見たり不平言つたり

する的人は、到底向かないのである。

四十八

四、快活。しよつちう陰氣で曇り勝ちの人は面白くない、一體が快活な子供のことから、指導の任に當る人も餘程快活でなくてはいかぬ。

其他數へ立つれば、いろ／＼あらう。幼兒の理想になる位な儀表も必要だらう、自然と薰化を與へるの徳操も言はずもがな、要するに此點に於ては成るべく品格が高くなつてはいかぬ。

五、智識。いろ／＼な理科博物其他文學上の智識に富んで居ることを要する。然も之を子供づく表出する技能が必要だ、何によらず子供は問ひたがる、之に向つて極めて子供らしく、併も眞理に合つた答をしなければならぬ。従つて保母たる人は、何れ讀書の嗜は勿論、萬事につけて研究心に富んで居ねばならぬ。

六、以上は先づ、一般普通の資格といつてもよい。而して特別の資格として茲に、教育の理法と術と、殊に幼児保育の理論方法を心得べきこと、従つては、兒童精神發達の理法即兒童心理學及生理學、衛生等の一般の智識をも持つて居ねばならぬ。

(未完)

蠹魚のくひあまし

一日書を曝らす。いたく虫くひたる冊子あり。手にとりて見るに「子そだてぐさ」と題せる一篇なり。其の説く所致て嶄新にもあらず。且つたまぐ古めきて如何はしき節なきにあらざるも。さりとてあながちに棄つべきにあらず。こゝに其の或る部分をうつして、讀者に紹介する事となしぬ。

子を育つる事は父母の教にあり。そが中に母はとりわけ心せざれば成長して正しき人にならず難し。然るを世には父は教ふるもの、母は養ふもの

とのみれもふは甚しきあやまりなり。そは子うまれて四歳五歳になるまでは母の懷をはなれざれば、父よりも母の教ふるが近きなり。父の教ふるは七歳八歳より後の事なるから、まづ其までに母のよく教へざれば、七歳入歳になりても愚にして父の教も受けざるものなり、そは俗言にも「三歳兒の魂百まで通る」といふ。此言まことに然り。抑人の魂は神の資にして教を受けずとも自然に善なるものなれども、世の凶惡にまじはりて善を失ふなり。されば神の賜へる本づきの眞意に違はざる様にと教ふべきことなり。

たとへば木草の種を植ふるに、其の種はよく眞直にのびん事を欲するを、それを人々手いれして成木させんとする時は、却て自然と成木たるとはおとれるなり、又若木の中、あしく癖つきたる木

は成木^{なまき}しても直る事^{こと}なし。人も之^{これ}に異なる事^{こと}なしとかくに小兒^{こども}のうち、くせつきたるは、成長^{せいちょう}してもなほなる事^{こと}なきものなれば、母^{はは}たるもの其心^{そのこころ}をえてよく育つべきなり。

しかするには先づ母^{はは}たるもの平生^{へいせい}に心を正^{ただ}しくせずばあるべからず。いかにとなればその子^この形となり、氣^きとなるものは、みな母^{はは}の感^{かん}によりて各別^{かくべつ}なるものなればなり。感^{かん}とは見るもの聞^きくものにつきて、よしとかあしとかうれしとか、悲^{かな}しとかあるはおそろしとか、拙^{つた}しとか、其物^{そのもの}に是^{これ}はと思ふ事^{こと}あれば、胎内^{たいない}の子^こ其の感^{かん}に應^{おこ}じて其の氣^きを受^うけ、其の形^{かたち}をうくるなり。故^{ゆへ}に兎肉^{とにく}を食^くふて兎口^{ミツグチ}を生^うみ、狸^{たぬき}を食^くふて毛生^{もうせい}したる子^こを生^うむもの世^よにはまゝあり。いはんや惡食^{あくしょく}して胎毒^{たいどく}を生^うずるに於^おてをや。

因^{よなき}にいふ。海^{うみ}に住^すひヒラメといふ魚^{うなぎ}の腹^{はら}に子^このあるうちは、餌^えを食^くはずといふ事^{こと}、釣^つするものに之^{これ}を聞^きけり。人^{ひと}として惡食^{あくしょく}するはヒラメにおとれり。また火事^{くわじ}を見て赤^{あか}き紋^{もん}ある子^こをうみ、首^{くび}く、りを見て首^{くび}に紋^{もん}ある子^こを生^うめるものあり、是^{これ}を以^{もつ}て若^{わか}き女^{をんな}は目^めに怪物^{くわいぶつ}をみるべからず。怪物^{くわいぶつ}を見る時は胎内^{たいない}の子^こ其の形^{かたち}をうく、故^{ゆへ}に獸^{けもの}を獵^{とら}ふもの、子^こに、稀^{まれ}に獸^{けもの}のかたちに類^るせる子^こうまれ、鳥^{とち}をとるもの、子^こに雀^{とみめ}目の生^うるゝことあり。是^{これ}を世^よには報^{ひく}ひなりといふなり。

報^{ひく}にてさる事^{こと}もあれど。大概^{たいがい}感^{かん}によれるものなり。それゆゑに名醫^{めいい}頼案^{らいあん}といふ醫書^{いしょ}に、越^{こし}の國^{くに}に夫婦^{ふうふ}あり。大善寺^{だいぜんじ}といふ寺^{てら}の金剛神^{こんかうしん}の側^{そば}に鍾^{かね}養^{やう}して其の婦^ふを居住^{すまわ}しむ、一子^{いつし}をうむに其の兒^この形^{かたち}顔^{かほ}のすみに肉^{にく}起^{おこ}て角^{つの}のごとく、鼻^{はな}の孔^{あな}は縮^{ちぢ}りて夜^や

又またに似にたるは、蓋けだ婦人にじんこゝに居ゐするが故ゆゑに、偶たま其その縁えんに觸ふて感かんじてこの形かたちをうけ得えたるものなり
古人こじんの胎教たいけう謹つつししまずばあるべからずとあり。此説このせう
よく思おもふべきなり。

さて若わかき女をんなは神佛しんぶつといへども、形かたちのあしかるに
は詣まうつべからず。世よに子安こやすの觀音くわんおんといふもの、美
女ぢよこの子をいただける姿すがたなるは、此心このこころを得知えしりたるも
の、作りそめたるにこそ。かくて人は見るもの聞
くものに付て、是ぞ感かんなきといふ事ことなし、故ゆゑに人
は萬物ばんぶつの氣きをかぬるなり。そは多口たぐちにしてよく手
足あしを動かうごかすものあり、そはキリ／＼スやミンサバ
エに類るせる人ひとなり。他目ひとめには篤實とくじつらしく見みせて、
人に油斷ゆだんをさせ、我が利えを得えんとかまふるものあ
り、こは空ねむりして盜ぬすする猫ねこに類るせるなり。淫
亂いんらんといふものあり、こは守宮しきうや鶏にせうりに類るせる人ひとなり。

食しよくを見るごとくはまはしがるものあり、こは蠅は
に類るせる人ひとなり。他の手てにあるものをほしがるも
のあり。こは鳶とびに類るせる人ひとなり。食しよくを惜おしみてくさ
りそこぬるまで、貯たくはへ置くものあり、こは鼯鼠いたちに
類るせる人ひとなり、此等これら皆禽獸みなきんじゆうに類るせるところに人
の恥はべき所ところなり。

然しかるを心こころの不正ふせいなるものは、常つねに賤いやしきものを
のみめづるが故ゆゑに、生まるゝ子こも又またいやし。かゝ
れば常つねに心を正ただしくして不祥ふしちうのものをみるべから
ず。替女かめのうたふ心中しんちゆう節ふしなどは、ことに不祥ふしちうのさ
はみなるものにして、婦人ふじんの聞きくべきものにあら
ず。もし深ふかくめづるに至いたつては、替かをうまんもは
かられず。そは金剛神こんかうしんに感かんじて夜叉やしやを生うめるにな
ぞらへて辨わふべし。又またうめる子の叔父おやふ叔母おはは從弟じゆうていな
どに似にることなどのあるは、母ははたるものゝ親族しんぞくを

むつぶこゝろの深さがいたす處なり。このゆゑに深く感ずる所ありて念々忘れざれば、其の感ずる所のまゝに欲する處の子をうむものなり。

さるからに劍術の家には代々其の術に達せる勇者うまれ、伎女の家には代々藝にいたれる女子うまれ、また國と處々によりて美女の生るゝ處は美女、工匠の生るゝ處は工匠と、自然にさるものゝうまると、これ其の土地の人情にて美女をうめるものは美女を生めるによりて人の愛を受けて、家とめるが故に他もうらやみて美女を生まん事をおもいて、常に美人を感じて念々忘れず、故に美女をうめるなり。小夜の中山、草津の山中のたぐひすなはち是なり。工匠も之に同じ。こゝをもて是を見れば美女をうまんもやすく、勇者をうまんもかたからざるなり。

されど美女をうまんとしても美女うまれがたく勇者をうまんとしても勇者うまれやすからず、また誰一人醜女をうまんとおもふものなく、惡者をうまんとおもふものもなければ、さるもの生るゝを以て、予が此説をおす時は、非なるが如くなれどさにあらず。人は心多きものにて、見るもの聞くものにつきて、之ぞ感なきといふ事なし。故に春の朝、花になく鶯をきけば心浮き立ち、秋風に木の葉のちり行くをみては心悲しと思ひ、其の時々心動くが故に、我が欲する處の心一定せずして、我が欲する處の子うまれざるなり。たとへば誰にまれ身は貴く家は富まん事を願はざるはなく、家はまづしく身はいやしかれとはおもはざれども、儉素といふ事を守ることなりがたくて、他が美味を食へば我もくはまほしく、佗が美衣を着

れば我も着まほしく思ふが故に、終には奢に走りて家もほろび、かしこまりて身を正しくせんことはしにくく、足をそらして狂言を咄すは誰もしやすきが故に、遂にはこもかぶりとなるが如し。かくて婦人たるものは常に夫の心を心にしていさゝかも私意なくと心がけざれば、家業を精達して子孫繁榮する事は難し。あらぬ遊業などに心うつるが故に放蕩なる子の生るゝなり。

さて世には女天下と云て、何事も女の先だちてする家あり。是は甚だよからぬ事にて、家めつ亡の基なり。かゝるものゝ子には女子をうまば淫亂男子をうまば放蕩ならん。されどさるものゝ子にも、淫亂放蕩は生れずして子孫よく榮ゆるなり。

是は別に善行ありて然るか、又は夫の仁心あるによれるか、然らざれば積善の家には必ず餘慶あり

といへる類にもやあらん。必しも吾がいふことをなわやしみそ。こは正しき證ありていふ事なれど其は今は云はず。こはとみに婦女子の爲にものせるにて、わかりやすからん事をむねとつとめたり。ねがわくはあまねく人の見ん事を。

煙草好き男

大抵の男の人は、煙草をのむ習慣をもつて居るがべつにのむことをしないで、時と場所とを定めたらば宜しからん。西洋に留學せる日本人は、何處と定めずに、無闇とふかす所から、客間や應接間の窓掛けを焼いて仕様がなない相だ。

子供の間食

何れは、大人から較べると發達の盛な子供の事だから、三度の食事時間外に、食物をはしがるのは

無理でない。夫に付きて、英吉利のロツクといへる人の言葉に、子供が三度の食事以外に食べたがる様だつたら、他のものをやらないで、パンをやつたらよからうとあつたが、我國でも、せめてはしつこい餡の這入つたのや、お砂糖ぐるみのお菓子と與へることをよして、なるべくなら、間食に御飯を食べさす事にしたら、身體の爲にもよからうし、又儉約にもなるであらう。

痰の検査

東京の衛生技師の某氏、試に新橋ステーションでいろ／＼の人のほき散らす痰を拾ひ集めて検査をした所が、其中で澤山な肺病の微菌を發見したとの事だが、一體日本人は、どこといはないで、痰や唾をはきちらす傾がある。何時だつたか態々唾壺を備へ付けて居るにも係はらず、廊下ではいて

居る紳士を見た事があつた。早く改めたい癖である。

瀧廉太郎氏

音樂學校を卒業して、獨乙に留學を命ぜられ、間もなく病を得て昨年歸朝した同氏は、本年に入つてからとう／＼肺患の爲めに斃れたが、生前、既に肺病と知つてからは、人と對話するに決して眞向ひになつてはしなかつた、他出するには必らず自分の痰壺を持つて歩いた、來客に接して茶などくむ時には、自分で注がないで客自から注がせた、傳染病者としては、誰でも此位の心掛があつて欲しいものだ。

計入制出

入るを計つて出るを制すとは經濟の原則である、然るに華侈の風潮は、今日では此原則を殆んど蹂

躑こ躑こして居ゐる様ようだ、三十圓さんじゅうえんの收入しゅうにふよりなき者ものも、其その外ほか觀かんを飾かざるに於おては、殆ほとんど五十圓ごじゅうえん七八十圓しちやうじゅうえんの收入しゅうにふある者ものと同じ様ように苦心くしんして居ゐる、食物しょくぶつも滋養じやうやうあるものでなくてはいけない、住居すまゐも相當さうたうなものかはしい、少し遠とほければ歩あるくのはオツクーだから車くるまにも乗のらねばならぬ衣服いふくも綿服めんふくや二子ふたこでは娘むすめは人前ひとまへに出だせぬ、勝手かたてのことや拭ふき掃除さうじなども下女げぢやうを置いて、妻君さいくんはたい指圖ヨシヅをして行ゆかうといふのである。要えさうするに今日の原則げんせきは入いるを計はからず出でるを制せいせずである。此傾このかたは寧けしろ實業家じつげうかよりも月給取げつぎとに多い、月給取げつぎとに貯蓄ちちうの出来きないのも無理むりはない

讀書餘錄(三)

婦人ふじん 善惡ぜんあく 兩面鏡りうめんきやう

聲

水

シルレルの小品文せうひんぶんの中うち、此一篇このべん、頗すこる趣味しゆみに富とんで居ゐる。原文げんぶんの題目だいめいは『婦人ふじんの複雜ふくじやうの驚おどろくべき一例いれい』といふのである。筆水ひづいの筆ふで、中々なか此大詩人このだいしじんの潑刺自在はつちつじざいな文章ぶんしやうの百分一ぶぶんいちをも寫うつすことが出来きない。例れいによりて、其梗概そのかうがいを紹介せうかいする許ばかりである。

飛鳥井侯爵あしかわしやうといふのは、此國貴族このくにきぞくの名門めいもんの系統けつとうで、當世向ちやうせいむきの若縉士わかしんし、何不足なにふそくなく其日そのひを豊ゆたかに過すして居ゐる立派りっぱの身分みぶん、氣前きまへも至いたつて愉快ゆきわいな、從したがつて交際かうさいも甘うまく、十人じにんが十人じにんながらに好すかれる性質しやうの人ひとである、然しかしたゞ一つの缺點けつてんはといふと、女子こしよの婦德ふとくなといふことに付ついては、格段かくだん氣に留とどめない方はうなのである。所ところが、或日不圖あるひふとした所ところからこの侯爵かうしやうの心を動かうごかすに至いたつた一人ひとりの婦人ふじんは古澤夫人こさくさふじんといふ身分みぶんのある後家きけさん、心狀こころざまの伶俐れいれいな、

風采の閑雅な、交際に抜目のない、然かもどこまでも、剛氣で氣位の高い、古澤夫人である。婦人の歡心を得んとて、今迄に格別骨を折ることも知らなかつた侯爵は、古澤夫人を得んがためには、あらゆる手段を盡して、殆んど一切を犠牲に供した位であつた。前の婚姻が餘り幸福に終らなかつた古澤婦人は、今回侯爵からの申し出でに對しても、種々と纏まらぬ考に心を苦しめた後、遂に侯爵の心に従ふことになつた。侯爵の喜びや知るべしで、侯爵は之で無上の幸福を得たのだ。併しながら、若し侯爵の心をして、此當時これ程の狂熱を以て愛し又自身も愛せられた所のこの優しい婦人に對していつまでも眞實を盡して行く事ならば、勿論侯爵の幸福は十代萬代までもことはかれたであらう。

さて、一二年は譯もなく過ぎ去つたが、此頃からして侯爵は、漸く夫人との生活に付いて單調の感じを起した。そこでいろ／＼の注文を夫人にす、随分無理な注文にも夫人は一々同意を與へた。所が一日一日と過ぎ行く中に、何時しか侯爵の姿は夫人に遠ざかり行くのみとなつた。晝の御飯時にも見えられない、晚餐の席にも出られない、何だか何時もソワ／＼と忙がし相にして、夫で會さか夫人の室を訪ふことがあつても、何か用事を拵らえては成るべく短かく切り上げて返らうとする、時によると、何だか分らないが、獨りでブツ／＼口の中でツブやきながら室内をせう事なしに歩いて見るとは辛氣相に長椅子に身をうち倒してそこいらに積み重ねて在る本だの新聞だのを、手當り次第にあれこれと取つて見ては投げやつたり

して、夫からア、アとため息などしながら遂に眠つて仕舞ふ。

夫人も、是に至つては、自分が既に侯爵から愛を失つたのだといふ事を知つた。夫で或日のこと、珍らしく晚餐を共にした後で遂に意を決して次の様な話をしだした。

『御前、何をさうお考へ遊ばして居らつしやる？』

『お前こそ、何か考へて居るのだらう？』

『夫はさうお見えになるかも知れませぬ、鬱いで居ると仰つしやれば、鬱いで居る様にもありません。』

『じゃあ、何故鬱いで居るのかね？』

『別に何と申して』

『そんな事はありますまいじやないか、別に隠して居るには及ばん（ア、アと欠伸しながら）判然

お話しなさい、言つて仕舞へば、夫で二人とも反つて清々するじやありませんか、

『ハイ實は餘程以前から、申し上げようかとは存じて居りましたが、何分にも、御前を侮辱する様な事にも當るかと思ひまして、

『なに、私を侮辱する？、お前が？』

『まあ、そんな事にも當るかと思ひまして……而し、私が別段罪のないと申す事は神様が證明して下さいます。たゞ何事も神様の呪咀だと存じます。』

『フーン、夫から？』

『ハイ、夫で私はたゞく不幸な身分だと思ひます、夫でつまりは御前をも不幸にするかと考へまして……が、御前、もう、何も申し上げません、すまい、

『お咄しなさいよ、お前、何か心に秘密があるのだらう、夫婦の間に秘密を持てるなんて、始からそんな事はないといふ條件じやありませんか、』

『御前、全く其事です、こんなに私が悲しい思を致しますのも、つまりは今お謎になつた二人の間の秘密の爲です。私の近來の様子が、まるで前々と打つて變つて活氣がなくなりました事は、御前には御氣があつき遊ばされませぬか、只今では毎日三度〳〵の御飯も甘く戴いたことは一日もありませぬ、いゝえ夜分も録に眠られない位です。さあ、こうなりますと、女の愚痴とは申しながら、つい〳〵つまらぬ考も起りまして、夜更けて寢られぬまゝに、つい、獨りでいろ〳〵な事も申して見ます「御前は果しても

―私を愛して下さるのだらうか？ いや〳〵元々通りに違あるまい、夫では何か御前に向つて私が不平がましい事があるのでせうか？ 別に何も無い。もしや御前には他に何所かお遊び所がお出来遊ばしたのではありはしまいか、よもや〳〵そんな所は、と申して、御前の方が、前々通りおやさしくかいでなるとすれば、これはどうしても、自分の方が變つたのに違ひない、そうだ自分の方が變つたのだ、夫で、今では、あの當時、かねて、行く〳〵はと心に期して居つた望みの光りも消えれば、嬉れしと思つた恩愛の影も隠れたのだ……御前が御歸りが遅いといつて、今迄の様に、嬉しい様な心配もなし、お歸り遊ばした所が、お足あとの音が聞こえた所が、収次の知らせがあつた所が……否々お這入

り遊ばしたにしても、より嬉しい飛び立つ氣も致しませぬ。アー、か様の事はもう、とつくに過ぎ去つたのだ、私はとう／＼見捨てられたのだ

『これ、お前は何をいつてるのだ』

夫人は是に至りて、兩手を顔に宛て、頭を垂れたまゝ暫らくは、無言であつた、が、やがて、又口を開いて、

『ハイ、私には、御前がどう御返事遊ばすといふ事はチャンと分つて居ます、こんな事を申し上げて、どんなお叱りを蒙むるかといふ事はもうチャンと分つて居ます。どうか、其邊は御免しを願ひます……イーエ、どうか十分御叱り下さいませ何れ、私が申し上げたいが悪いのですから仰しやる丈の事は皆承はりませう。然し御

前、實其通りでございましょう、自分を欺き御前を欺くと申す事は、此上もない耻辱でございませれば、思つて居る丈けの事を申し上げたのでございます。そりや御前は、矢張元々通りの御前ですが、私はもはや従前の女でありませぬ、然し、夫でも私は御前を尊敬は致します、以前よりかもつと尊敬します、けれども、一體女と申しますものは、まゝ御前も私で御承知になつて居られませうが、一體が、氣の小さなものですから、もはや愛情がなくなつて仕舞つたと申しては、とても心に深く隠して、装うて居るなと申す事は出来ません、私のこの自白、實際左様感じられますが、この自白は、私は最も恐ろしい事の様に信じます、どうせ、私は、輕薄な女です、虚妄者です、どうか、たんとお咀ひ遊ば

せ、存分にお責め遊ばせ、一番惜い女だといふ
極印を私の顔にお押玄遊ばせ、イーエ、何も私
自分の故です。ハイ、何でも御前の命令通りに
承はりませう、然したつた一つ御前を瞞した事
など申す事は、之迄一つも覺えがございません
から之丈けは仰しやる通りには承はることが出
來ません。

かく言つて夫人は遂に長椅子に身を打ち倒して
聲高く泣き出したのである。

(未完)

那瀑と瀧八丁(本紙口繪の解)

紀州和歌山市より船若しくは陸路によりて南に下
ること凡そ四十里にして熊野地方に至れば、北は
山岳重疊、屹然又囂然として恰かも屏風を立てた
らんが如く、南は太平洋海岸に迫りて、怒濤近く

山麓を洗ふ。面して八十丈と稱する那瀑は恰も銀
河の天より下るが如く此山岳の間に懸る、船にて
航する者は、潮岬を過ぎて甲板よりよく此偉觀
に接するを得べし。行きて近く瀑邊に遊ばんか千
歳の老松古杉は蒼鬱として天日爲めに暗く、十數
町を距て、轟然たる水聲と共に、飛沫來りて人の
袂を潤はし、夏尙肌寒さを覺ゆ。土俗那智の四十
八瀧を稱す、而して一の瀧より三の瀧までは羊腸
たる山徑の間、樹枝にすがり蔓を攀ちて至るを得
べし。本紙寫す所のものは其最も大なるものにし
て即一の瀧と稱するもの、眞景の偉觀遂に其面影
を見るを得べきのみ。此邊古跡多し、文覺の事蹟
は何人も知る所、而して花山院の事蹟は人餘り之
を言はず、三の瀧に近く、院の玉座をしつらひし
と稱する跡あり、大鏡に

熊野の道に千里濱といふ所にて、御心地をこな
はせ給へれば、濱づらに石のあるを御枕にてお
はとのごもりたるに、いと近くあまのしほやく
煙のたちのぼる心ばそさ、げに、いかにあはれ
におぼされけん

たびの空夜半のけぶりとこのぼりなば

あまのもしは火たくかとやみん

とある、以て徴すべし。

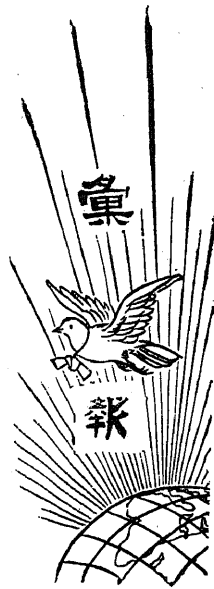
熊野河口に船を艤して溯ること凡そ八里、河流分
れて二となる、左すれば即ち本宮に至るべし。而
して右に上ること約二里、流れ愈急にして愈
巖然も忽ち深潭、水青くして動かざること油の如
き所に達す、靜八町の眞景即ち之なり。水深き所
十數尋、然も清冽、小魚自ら其影に驚き激湍とし
て逃遁す。兩岸の絶壁高さ數十丈、斷々として削

り成せるが如く、天に朝して日光を遮閉す。船を
浮べて一日の清遊を此邊りに食ばるに一身是れ飄
々として畫中の人の如し。斷岩の間に散點せる人
家は即ち田戸村の一小村落なり。

那瀑の壯觀、之を丈夫戰陣に立つて萬軍を叱咤
するに比すれば、靜の美觀は以て、天女仙郷に
遊んで翩翻として舞樂を奏するが如けん。

打つけに物ぞ戀しき木葉ちる

秋のはじめなけふぞと思へば



●櫻蔭會

從來女子高等師範學校の卒業生は東

京高等師範學校卒業生とも、茗溪會を組織し

來りしが、去月二日の全會總會に於て、愈女子

茗溪會員は男子の夫と分離し、見出しの如く會を

組織せりといふ。吾人は茲に本會の將來健全なる

發達を遂げ、大に女子教育界の爲めに貢獻せられ

んことを祈るものなり。

●文部省檢定豫備試驗問題

先月廿一日より十

日間舉行せられたる全試驗問題は左の如し

日本史

一、古代に於ける外蕃氏族の著名なるもの

二、文錄の役に於ける講和の條件
三、左の人々の年代及顯著なる事蹟

甲、平時忠 乙、淡海三船 丙、藤原直房

丁、高野長英

四、左の事項の解釋

甲、防人 乙、勘解由使 丙、小待所 丁、采女

東洋史

一、印度四等の種姓

二、唐の藩鎮の起原及び驕横

三、左の人々の顯著なる事蹟

甲、李斯 乙、元世祖 丙、クライグ 丁、大院君

女子師範學校師範學校女子部、高等女學校のみの教員志願者は左

の問題に答ふべし

日本史

一、古代に於ける外蕃氏族の著名なるもの

二、徳川時代に於ける洋學の起原

三、左の人々の年代及び顯著なる事蹟

甲、平時忠 乙、淡海三船 丙、藤原直房

丁、高野長英

四、左の事項の解釋

甲、防人 乙、勘解由使 丙、小待所 丁、采女

一、印度四等の種姓

二、唐の宦官の專横

三、左の人々の顯著なる事蹟

甲、李斯　乙、元世祖　丙、クライヴ　丁、大院君
△師範學校、中學校、高等女學校教員志願者の部

西洋史

(一)アウグスツス時代のローマの憲法
(二)ナポレオン一世に對するイギリスの政略

(三)左の人々の顯著なる事蹟

フレデリキ　セルペンソナ　Frederick　Barba-rossa
アレキサンデル　オン　スニヤ　Alexander of Parma

(四)左の地名に關する事蹟

レウクトラ　Leuktra
グラナダ　Granada
プレプナ　Plevna

△女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの教員志願者の部

西洋史

(一)アウグスツス時代のローマの憲法

(二)ナポレオン一世に對するイギリスの政略

(三)左の人々の顯著なる事蹟

オマー　Omar
シルレル　Schiller

(四)左の地名に關する事蹟

サラミス　Salamis
センプン　Sempach
セダン　Sedan

幾何

1. ABを一つの圓の直径とし、ADを此圓のA點に於ける切線とし弧BCを半圓周ACBの三分の一なりとす、今弦ECを延長してADとD點に於いて會せしむれば直線ADと半圓周ACBとは孰れが長きや

2. 與へられたる二つの同心圓を一つの直線にて截り此の直線の大圓内の部分が其の小圓内の部分の二倍に等しくなる様にせよ
3. 平行の二直線AB、CDあり今AB上の與へられたる點Aに於いて此の直線に接する多くの圓を畫き此等の圓がCDと交はる點に於いて其の圓に切線を作るときは此切線は皆一定の圓に切する事を證明せよ

4. 與へられたる一點を過りて與へられたる二つの圓の各々と同一の面積を有する圓を作れ

地理科

1. インドシナ半島の圓を畫き次の地名を記入せよ

メコン　ソンコイ　イワラテ　ハイフオン　ラングン　チアン
タパン　メナム　ヒナン　シエンマイ　サルウィン　ヌクナム
サイゴン

2. 左の地に就き知る所を記せ

ゴッツバークガルベストン　エルフルーズガン　アピアケニ
ア　中城灣　岳州

3. 東京よりサンフランシスコに通ずる電信線は何處を通過するか

4. スペンヘザンの探検事業に就き知る處を記せ

5. 瀑布の成因を問ふ

て、非常の盛會を極め、且つ聴講者の多くは、大低全國高等女學校教員大部分を占めたれば、其成績頗る良好なるを得たりといふ。されば、今後の女學校該科目の教授は、此講習會の結果により着々改良の實効を得るに至るべきや明なり。尙同氏には、同月十六日より相州横須賀に於て、同じく講習會を開きしに、之れ亦頗る盛況を極め、聴講志願者頗る多數なりしといふ。同氏の熱心今に始めぬことながら、斯道に取りて頗る多とすべきなり。

●女子商業學校設立の計畫

●女子商業學校設立の計畫 今回嘉悦孝子女史其他の同志計畫して法學博士和田垣謙三氏を校長とし女子商業學校なる者を新設して商家の子女及び諸學校の生徒にして將來商業界に身を委ねんとするものを養成せんと目下準備中なりといふ。

●東京市教員の俸給額

最近の調査にかゝる東京市正教員各區の俸給の比較を聞くに、尋常科に在ては四谷區の十七圓五錢三厘を最高とし芝區の十五圓三十三錢三厘を最低とし、平均十六圓三十三錢五厘なり、又高等科正教員の月俸平均額は二十二圓六十五錢五厘にして、之れを尋常科に比すれば六圓の差あり、最高を日本橋區の二十三圓七十一錢九厘とし最低なるを牛込の十九圓六十六錢七厘とす、次に准教員尋常科の平均は十二圓五十二錢六厘にして、最高を麻布區の十三圓八十錢最低を日本橋區と小石川區との十一圓五十錢とし、準教員高等科平均十三圓三十九錢一厘にして最高深川區の十八圓最低は日本橋區の十圓なりといふ。

●東京市内小學校と女教員の増加

東京市立小

學校尋常高等科正教員の總數千〇二十一一人なるが、内女教員の數は二百八十四人の多きに達し、麴町區の如きは男教員三十九名に對し女教員三十一名の割合にて前年に比すれば、非常の増加なりと、又以て女子教育の進歩を知るに足るべし。

●千葉幼稚園 千葉縣にては從來幼稚園の設けなかりしが、近來頗に其必要を感じられしより同縣教育會にては、其附屬として千葉幼稚園を設立し、去る六月より開園し翌七月十二日開園式を舉行せしが、目下幼兒數六十八名、會員脇谷しげ子女史主任として、専ら盡力せられつゝありといふ

●東京孤兒院の新築 牛込區原町なる同院は、定員三十名を限りしが止むなき事情により目下三十二名に迄達し、これに院役者を合すれば殆ど四十名近くに達することとて、在來の家屋は爲め

に狹隘を告ぐるに至りたれば今回赤阪區青山六丁目百〇五番地に新築せりといふ。

●東京感化院 府下澁谷村なる同院は、今を去る十八年前高瀬眞卿氏の創立したるものにして、其成績甚だ宜しく昨三十五年末の調査によれば入院生總數四百七十五名にして其内全く改悛の効を奏せしもの二百八十八名、其他百餘名は准改悛者として相當の職に就けりと、而して退院就業者の重なるものは中學生徒四十二名、商業者四十三名、農業者二十一名、商店被雇十六名、小學生徒十九名、巡查四名、洋行者五名、銀行會社員四名、専門學校生徒七名、兵卒七名、活版職八名、其他學校教師、官衙奉職村役場員等にして各方面の社會に分賦し、到る處職務に忠實なる評ありと、又同院は曩に帝室の恩賜金あり、今回又博覽會

に於て其設備の完全成績良好なるを以て褒賞を授けられたりといふ。

●白痴の原因 近來英國の名醫某の調査せる、

白痴の原因に關する統計表を見るに、調査人員二千八百人中、各種原因の百分比例は次の如くなりといふ。

誕生前の原因

百分比例

懷孕母の異常

二九・八七

結核性、腺病性血統あるもの

二八・三一

癲癇白痴

二一・三八

癲癇其他の神經性疾患

二〇・〇〇

暴飲

一六・三八

血族結婚

四・二〇

兩親の老衰並に不良結婚

一・七六

數毒

一・一七

誕生時の原因

早産難産等

四四・二一

誕生後の原因

小兒急痛

二〇・三九

癲癇其他の腦症

八・一一

頭部の損傷

猩紅熱チフス其他の傳染病

精神感動

小兒麻痺

過度の教育

六・一七

五・九五

三・〇九

〇・九二

〇・一六

●女子服裝圖案募集

三井呉服店にては曩に女子販賣員數十名を採用したるが今回懸賞を以て其服裝圖案を募集する由尤も此服裝は素より同店の販賣方に使用する目的とするものなるも而も一般の女子就業者に應用する事を得べきものたるを要すとなり其條件左の如し

一 服裝新案は動作の自由に便なるものにして而も成る可く優美の態度を保つを目的とすべし

一 圖案は必ず裂地若しくは紙を以て其雛形を製したるものか又は圖畫に寫し示したるものに説明を附すべし

但し説明のみのものは採用せず

一 服裝雛形用紙の寸法は總て鯨尺を用ひ縦一尺五寸横一尺以内たるべし

一 募集締切は來る十月三十一日とす

一應募圖案は當店に於て選定したる委員より之を審査す

一應募圖案の優等當選者には左の賞金を贈呈すべし

一等 金百五十圓 二等 金五十圓 三等 金二十五圓

●三十六年間の徒歩旅行 伯爵ロツコー、デア

ノール井ツチと名乗り三十六年間世界を徒歩したる一奇人こそ現はれたれ、彼はスラブ人にして奥國の籍にあるものなるが、其言ふ所によればこの長年月間の徒歩旅行には二個の目的あり、第一は彼は徒歩を以て最も健康に適する運動法なりと信じ、且つ各國の狀態を察し其實際の有様を観察するには瀛車の旅行は不充分にして徒歩に非ざればこれを爲すこと能はざるを信するが故にして、第二の目的は各國に行はるゝ監獄の狀態並に刑罰の有様を研究するにあり、一の個人として各國の監獄を視察するは至難の業にして、之が爲めに故意に自から罪を犯して獄に投ぜられ其視察を許さ

れざりし監獄の門をば安々と潜り入りて親しく其内部の狀態を視察したること屢々にして、彼は此手段によりて西班牙の監獄に一睡を試み、また有名なる西伯利亞の集治監の味を嘗むるの樂を得たりといへり。

●大學卒業生の乞兒 右に同じき奇人は米國一

大學の或る卒業生にて流浪人の体を装ひて六ヶ月間數千里の旅行をなし、或る時は職を得ざる工夫と偽はり、或る時は盲目の乞兒となりて種々の實見を爲したるが、其中乞兒となりたる時は一日十弗以上の収入ありたり、即ち乞兒は或る市街に於て正業に従事するものよりも多くの所得あることを見出したり、又或る市には乞兒俱樂部の設けありて相互に救助し、慈善家の姓名を印刷配布し或は種々の助言を與へ居るを見出したりといふ

●身●體●肥●滿●法●

最近のヘルズ雜誌の記す所によ

れば、非常に痩せたる女の六日間に三貫六百目の
 分量を増したる處方あり、即ち毎日十二時間眠り
 寢室は空氣の流通よく、餘り暖かならざる處にな
 し、輕き夜着輕き衣服を着、食物は穀物、コ、ア、
 新らしき果物、澱粉多き野菜物、芋豆等及び牛乳
 クリーム其他總て脂肪を生すへきものを常食とし
 て時々溫浴を取るに在りと。

●ソルズベリー侯

英國前首相ソルズベリー

侯は先月廿三日七十三才の高齡を以て逝去せられ
 たりといふ。侯は我が天保元年を以て英國に生れ
 し、少壯中學校及大學を卒業し、二十四才に至
 り、既に保守黨の候補となりて代議士となりたり
 當時侯の一身は非常の貧窮に陥り、千辛萬苦殆ん
 と冒さる所なかりしが、其間に處してよく清廉

高潔の節を守り遂に一點の聲名を汚す所なく、齡
 三十七才にして始めて官に就き、夫より一進一退
 昨年に至るまで首相たること前後四回、而して一
 方に於ては其間オクスフワード大學院及クライス
 トチャーチ大學の總長たり、平生最も深く學術を
 好み、其私邸には理學研究室を設け、朝を退くの
 後は毎日、此室に入りて理學上種々の實驗をなす
 を以て無上の樂となしたりといふ。

兵庫縣通信

在攝州武庫郡魚崎 通信員 平 岩 學 洋

●基督教會

神戸市には基督教會なる者中々澤

山ありて毎日毎夜の如く折りもさらず説教又は演
 説等各教會にてなされり、該市には基督教信者は
 比較的多くして、中には婦人も老幼を問はず多數

を占めれる由、然しながら全く精神からの信者は果して幾何あるかは知れず。

●私立今井學校 は赤穂郡尾崎村今井三造氏の設立に係るものなるが、該地は製鹽地方の事として從來不就學兒童の尠からざるを憂ひ、私財二千圓を抛ちて去る三十四年一月校舍を建設し、爾來多くの維持費を支出し現今の域に進みたるものなり、而して同校は専ら青年の補習教育に任ずる筈なるが、今は亦貧なる學齡兒童をも收容して普通進教育を授けかれり、目下在學生七十名悉く夜間の授業の由。

●村尾裁縫學校 は同郡なる村尾よし子の經營に係り、昨年七月の創立なり、同校當時は生徒僅に二十名内外なりしが今年度に至りて大に増加せりといふ、因に全郡神木すい子は從來の裁縫教授

所の如きものを更に私立學校となさん筈にて目下計畫中なりと。

●小學生の貯金 最近調査に係る縣下赤穂郡各小學校兒童の貯金成績をさくに、全郡は概して良成績の由、全郡二十五校中各小學校教員獎勵の結果、全郡通して二千五百五十七圓十四錢六厘に達したりと。

●水害 先月は雨降り勝にて鬱陶しかりしが、特に八九日は非常なる降雨のため縣下所々の各川満水、又は溜池堤等崩潰し損害甚だ多し、神戸市の如きは家屋海上にあるが如く満水し、市民の困難筆紙の及ぶところに非らざりし由、洲本町の如きも中々の大困難にてありき、人畜の死傷多少ありたり。

●幼子の死亡

我が縣下に於ては新聞紙の報ず

る所に依れば、殆ど毎日幼子が演車に引かれたる
とか、或は水中に、井水に、溜池の中に落ちたる
とかして幾多の幼子が死するなり、是れ思ふに家
庭即ち母人の監督の不行届と察せらるなり、世の
父母諸氏注意有たきことにこそ

●小學生徒の遊戲 本縣下にては小學校生徒の遊
戲は中々盛なり、其の種類はベースボール、ロン
テニスクリケットその他各遊戲書に見へる団体
的遊戲等なり、特に御影師範學校の如き中々盛に
て附屬小學校の特徴は遊戲なりと某氏は語れり、
斯の如く盛なるは尤も悦ぶべき事なれども、一方
に於ては欠くる所ありと余等は觀察しつゝあり、
元より讀で字の如く遊び戯るゝものに相違なけれ
共、其遊び戯るゝ間にも相當の規律あるべき筈の
者と余等は信するなるに多くの場合は遊び戯れ過

ぎて不規律に流るゝやに見受けらるゝなり、是れ
元より兒童の罪にあらざして教授者即ち監督者の
罪といふべく、用意周到ならざるによるなり、故
に生徒は自然規律正しき事はいとふよーになりて
嚴格なる(比較的)体操は喜びてなさずなるなり、
又余等の察する所に依れば、小學生徒一般忍耐力
に乏しき様なり、種々の原因によるものならんが
遊戲の不規律も其の原因の一ならんと思ふなり、
其の任に當りあるものは宜しく注意すべき事なり

近來遊戲法の盛になれる結果、何處にも往々かゝる弊あり
御尤もの觀察といふべし。



圖

會費領收

自明治三十六年七月廿日
至全 八月廿四日

會報

姓 名

中野	芳枝
波多野	あぐり
野副	とよ
川口	雪枝
大野	朝比奈
武藤	むめ
大塚	さだ
安達	けい
安野	みち
西浦	りつ
木下	やす
橋本	ひさし
若林	みつ
岡田	うめ

五〇 三〇 一、二〇 一、〇〇 六〇 七〇 一、〇〇 六〇 六〇 七〇 八七 二、〇〇 五〇 二、〇〇 一、〇〇

三三全三三三全三全三全三全三全三三三三全三三三全三三三全三
七六 六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六
一九〇八七八一二二七二八二一一二六六一一三九二五九二八四〇三一
外
二
七
錢

島雄益造	熊谷鋼太郎	櫻山滿子	中條ひろ	福岡 蕪	安藤さつ	小原みよの	小澤さき	山田かめ	小々高みさを	推川たま	中野 豊記	伊藤 真	栗原いし	平岩繁治
------	-------	------	------	------	------	-------	------	------	--------	------	-------	------	------	------

二郵錢拾參冊價定行發日五月九

婦人界臨時增刊披露

『婦人界』の増刊として發行するこの遊學案内東京の女學校は世にありふれたるそれ等の如く單に規則をあつめたるものにはあらずして、東京府下に散在せる大小各種數十の女學校の所在地はもとより校長はじめ主なる講師の履歷、教育上の意見、生徒の成績、卒業生の身のふりかた、及び世間より見たる學校の評判など一々記者が實地につきて細大洩さず精

遊學案内東京の女學校

密確實に取調べたるものにして、一たびこの書を繙きたる上にて、修學の目的を立たるものは、決してその方針をあやまることなしと謂ふも過言にあらざる最新無比の遊學案内なり。されば世の女學生諸子はもとより、子女を持たる父兄は、世の風評に拘泥せられず、よく本書を熟讀せられて、子女勉學の學校を選擇せられんことを御披露かたぐ満天下の父兄に謹告すること爾り。

後付の一

東京市本區橋本三丁目七番地
金港堂書籍株式會社

電話本局三〇二番(特)本局六一七番

厨
の
寶
典

著史女子玉井横

法理料庭家

錢八税郵錢五十四製並 錢十税郵錢十六製上

てしすらな日數後行發
すとなきつ亦版再れ切賣版初

未
曾
有
の

發

五

著生先淵晃田池子眞樂

全部六二〇頁



極彩色口繪入

宛錢六金料送郵錢卅金冊一價正 冊三全下中上
.....美優尙高り綴とまや本製.....

賣

版

譯人主庵一抱 著一ユシ國佛

近
刊

說 小
密 秘 の 黍 巴

印
刷
中

有國全所捌賣 ◇ 房山富 ◇ 京東元行發

新奇發明 増酒資料

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲の釀造化學作用の一大發明新法なり(附録)腐敗酒直し法、醬油三倍増法、味淋酒

遠造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香露葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内、今回披露の爲拾萬部限り、無代進呈す酒造家の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要録を送呈す速に見よ營業上早く利用せよ驚らざる**大有益**の秘訣なり是ッ非早くと確證す(意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に隨せし無効の偽法を傳ふる好者顯はれたり有志者深く注意して爲傳者に欺かるゝと勿れ(當館は去廿壹年の創立也)發元祖 軒東京市神田五軒町拾九番地 日本授産館

肉色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても**純白色**に變特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に變**化**し艶美の容貌となるを確証す世上種々難多の色白に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製入拾錢特別製分壹圓五拾錢 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** **專賣元**

月やくし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も

必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れ忽ち半年以上の月經閉止にては二三ヶ月間滯りたる月經にて

も必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及



惡血毒血と確證する但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

わきが 根治確證

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずるも速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事(電話下谷五四六番)以上 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

明治三十四年二月廿八日第三種郵便物認可



唱歌教科書

空前の唱歌良教科書！
檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定済

郵税一冊に就き金四錢

生徒用	教師用
全四冊	全四冊
第一卷定價金三十錢	第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢	第二卷定價金三十錢
第三卷定價金三十錢	第三卷定價金三十錢
第四卷定價金三十錢	第四卷定價金三十錢
第三卷定價金十八錢	第三卷定價金十八錢
第四卷定價金十八錢	第四卷定價金十八錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書。博し非常な大用。三版發行の盛運に會し、本行の今更に其部省の檢定を経て、生徒用教師用共に文部省の榮を得たり。從來文部省檢定済の集は悉く教師用即ち許可せられたるし、眞の教科書とて、檢定を経るもの。は實に本書か如く。該科の教授上最も知るに足るべし。

洋琴 金參百圓以上 各種

グワイオリン

鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種
舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上 小太鼓八圓半以上 シンバル 金四圓以上 其他バス、バリトン、テナール、アルト、コルネット、トロンボン等 金貳拾圓以上 百六拾圓迄

鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 橫笛金壹圓以上
○學校用一組拾參圓

手風琴

金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種

保險 山葉風琴

定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジョーレ、その他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

ピアノ、調律修繕

郵券貳錢 御送附 目錄進呈

(ヨキ號略信電) 番九廿百五橋新話電

店器樂社商益共

區橋京市京東 地番三十町川竹